九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[022]報告

岡崎, 智己
九州大学留学生センター : 教授

高原, 芳枝
九州大学国際交流推進室 : 准助教

西原, 暁子
九州大学国際交流推進室 : 准助教

郭, 俊海
九州大学留学生センター : 准教授

他

https://doi.org/10.15017/4777991

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 22, pp.191-282, 2014-03. 九州大学留学生センター
バージョン：
権利関係：

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，191－198
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 191-198

九州大学におけるサマーコースの実践

― 2013年ATWプログラムの概要と実施報告 ―

Report on the 2013 Asia in Today's World (ATW) Program

岡　崎　智　己*

高　原　芳　枝**

西　原　暁　子**

0．はじめに

Asia in Today's World（ATW）は、今年度13回目のプログラムを開講・実施し、29名の参加者を受入れた。これにより本プログラム開始以来、通算受入れ留学生は18カ国87大学480人となった。

本稿では、2013年プログラムの実施概要を報告するとともに、プログラム実施から明らかになった点について考察する。

1．2013年 ATW プログラムの概要

実施期間	2013年6月25日（火）～ 8月8日（木）
対 象 者	外国の高等教育機関に在籍している学部生及び大学院生で以下の条件を満たすもの (1) 学業及び人格が優れており原則として在籍している大学の推薦を受けた者 (2) 留学の目的及び計画が明確で日本への留学の成果が期待できる者 (3) 日本での留学期間終了後在籍大学において学業を継続する者 英語を母国語としない者については、TOEFL550点以上の英語能力を有する者
開講科目	1）人文・社会科学系「アジア研究コース」全４科目（教育言語：英語） 2）日本語（初級前半～中級後半・全４レベル５クラス）
奨 学 金	12万円／人を16人に支給
見学旅行 （登録制）	1）佐賀県西有田町 棚田農作業体験（日帰り）　参加料 2,600円 2）錦帯橋、厳島神社、広島平和記念公園（1泊）　参加料25,000円 3）日本文化体験（茶会・座禅）（半日）　参加料 各500円

*九州大学留学生センター教授
**九州大学国際交流推進室准助教

宿　　舎	以下の組み合わせにより希望をとり、調整して割り当て 1）５週間ウィークリーマンション＋２週間ホームステイ 2）全期間ウィークリーマンション 3）５週間民間学生寮＋２週間ホームステイ 4）全期間民間学生寮 5）全期間ホームステイ
参 加 費	授業料88,800円（６単位分相当）・宿舎料60,000円～130,000円（宿舎のタイプにより異なる）・見学旅行費（登録制）⇒見学旅行の欄参照

受講者数

2013年の応募者、並びに受講者（＝受講許可者の内、実際にプログラムに参加した者）の国別内訳は以下のとおりである。

応募者総数	受入許可者総数	受講者総数
35人	35人	29人

（単位：人）

アメリカ	イギリス	韓国	台湾	香港	インド	シンガポール	タイ	フィリピン	マレーシア	計
7	2	2	2	2	1	6	1	1	5	29

開講科目

人文・社会科学系「アジア研究コース」４科目と「日本語コース（４レベル・５クラス）」開講した。

①「アジア研究コース」の開講科目と各科目の受講状況

各科目とも、授業回数は15回（30時間相当）で２単位相当とした。「アジア研究コース」を選択した学生は、以下に挙げる開講科目から、２コースを選択し受講している。

開講科目・授業担当	受講生数
1. Japan and Asia-Pacific in Modern Times See Heng Teow, Associate Professor, National University of Singapore	13人
2. Cross Cultural Relations: Understanding and Dealing with Contexts Antonette Palma-Angeles, Associate Professor, Ateneo de Manila University Rofel G. Brion, Professor, Ateneo de Manila University	16人
3. Japan in East-Asia: the Dynamics of Politics and Society Dimitri Vanoverbeke, Professor, Catholic University of Leuven	20人
4. Death in Traditional Japanese Literature in the Asian Context Noel J. Pinnington, Associate Professor, University of Arizona	9人

②日本語コースの受講状況

ATW 期間中、計60時間の授業を行った。（２単位相当）

初級１	初級２	初中級１	初中級２	中級	計
10人	4人	5人	6人	4人	29人

２． 受講者の評価

参加者による開講科目とプログラム全般については、例年どおり評価は良好であった。

- プログラムの総合的な評価（有効回答者数：29人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	23人	6人	0人	0人	0人	4.79 ／ 5.0

- 「アジア研究コース」について（有効回答者数：29人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	14人	14人	1人	0人	0人	4.45 ／ 5.0

- 「日本語クラス」と「アジア研究」とのバランスについて（有効回答者数：29人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	9人	19人	1人	0人	0人	4.28 ／ 5.0

- 「日本語コース」（有効回答者数：26人）

満足度の平均（%）	90.85

- ホームステイについて（有効回答者数：17人）

立地	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	6人	8人	1人	2人	0人	4.06 ／ 5.0

設備	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	11人	5人	1人	0人	0人	4.59 ／ 5.0

待遇	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	13人	4人	0人	0人	0人	4.76 ／ 5.0

全般	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	10人	6人	1人	0人	0人	4.53 ／ 5.0

今年度は６名が全期間のホームステイを、12名がコース最後の２週間でのホームステイを希望した。留学生受入を経験する家庭を少しでも増やすことでホストファミリーのリピーター確保につなげ

たいため、立地が遠すぎる場合を除いて、初めて応募した家庭にできるだけ受入れてもらうよう選考・組合せの折に配慮している。

今回は全期間（７週間）受入のホストファミリー６家庭中３家庭が、また２週間受入のホストファミリー12家庭中８家庭が初めての受け入れであったが、大きなトラブルもなくホームステイを終了した。なお、帰国直前に受講生の一人がパスポートを紛失するというアクシデントがあったが、ホストファミリーと九大生チューターのサポートにより迅速にパスポート再発行の手続きを行うことができ、当初の予定通り帰国できた。

- チューターについて（有効回答者数：27人）

プログラムチューター	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	18人	7人	2人	0人	0人	4.59 ／ 5.0

担当チューター	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る	評価平均
回答者数	20人	6人	0人	1人	0人	4.67 ／ 5.0

今年度のチューターへの応募者は74名であったが、その中から留学生と交流する時間を十分に取れるかどうかを重視して29名を選抜した。本プログラム実施期間の大半が前期の通常授業期間と試験期間に重なる時期であるにもかかわらず、１対１で配置された九大生のチューター（担当チューター）、及びプログラム全体の世話係として働いたリーダー的チューターの多くが献身的にATW受講生の世話に当たったため、受講生の九大生チューターに対する満足度は概ね高い。

３．参加者の応募理由

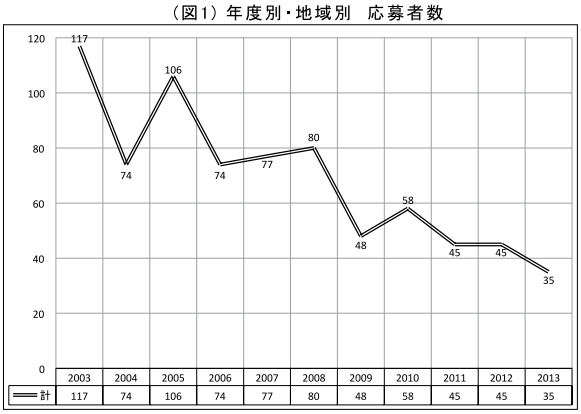
今年度のATW参加者29名に、本プログラムに応募した理由についてアンケートを行って訊ねたところ、「先輩、友人、教師から推薦された」、「料金設定が手頃であった」、「日本文化に興味があり、実際に日本を体験してみたかった」、とういう理由が最も多く、その他には「日本語上達のため」、「福岡に行ってみたかった」、「７週間という期間が適当だった」という回答もあった。

回答の中には、プログラム内容をよくよく吟味した上で応募を決めたのだろうと推測されるもの（下記）があり、これらはプログラム設計の意図がよく理解されている例として、運営側を喜ばせた。

- 大学院生にも開放されるサマープログラムは他にない。
- 他のプログラムにはないアジア研究コースが開講されている。
- 学部生向けのサマープログラムは勉強より遊びが中心のようだがATWは勉強と文化体験に重きをおいている。
- チューター制度が整っているプログラムが他にはなかった。
- 学生寮とホームステイの両方を体験することで日本の生活をより現実的に知ることができると思った。

4．応募者数の動向

（図1）年度別・地域別　応募者数

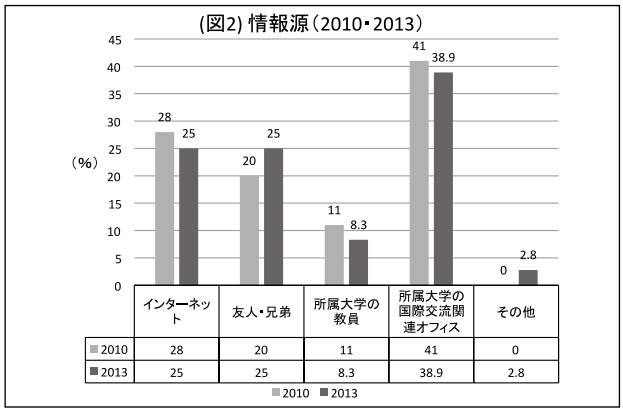


	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
東アジア	54	37	41	35	22	18	12	15	15	18	5
東南アジア	43	20	51	25	27	36	13	16	12	11	20
南アジア	0	2	1	0	0	0	0	1	0	1	1
中東	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
北米	19	14	5	11	25	21	21	18	12	9	7
南米	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
欧州	1	1	8	3	2	4	2	7	6	6	2
計	117	74	106	74	77	80	48	58	45	45	35

（図１）

（表１）新規応募大学数／応募大学総数

年	2009	2010	2011	2012	2013
新規／総数（%）	5 ／ 24 (20.8)	10 ／ 28 (35.7)	2 ／ 16 (12.5)	9 ／ 24 (37.5)	5 ／ 16 (31.3)



（図２）

図１は2003年度以降2013年までの応募者数の推移を示したものであるが、2013年は過去最低の応募者数（35名）となった。東アジアからの応募者数の減少が顕著で、特に中国からの応募者が一人もなかったことと、韓国からの応募者も減少していることの影響が大きい。一方、東南アジアからの応募者は過去５年間で最多であった。

全体として応募数は減少しているが、応募者の出身大学を見てみると、今年度初めて応募のあった大学の全応募大学に占める割合は31.3%であり（表１）、新規大学５校はいずれも本学の学生交流協定パートナー校ではない。このことからATWの情報がインターネット等を介して徐々に広がっているのではないかと推測されたが、今年度の参加者にATWの情報源について調べたところ、2010年に比べて「インターネットによる」との回答が幾分減少し、「友人、兄弟、先輩等に薦められて」という回答が増加していた（図２）。

応募者数減少の原因を断定するようなデータはないが、今後応募者数を増加させるためには、留学情報サイトを利用してインターネット上での本プログラムの露出を増やすとともに、過去の参加者を介しての広報を行うなど、積極的な広報活動が必要と考えられる。

5．チューター活動を通じての日本人学生の意識の変化について

留学生受け入れプログラムとしての本来の機能・役割に加え、ATWが本学学生の能力・資質の向上と海外留学促進に好影響を与えていることは、チューターをしてくれる学生たちと接して常々感じていたことではあるが、今回チューターへアンケート調査を行うことによって、その実際を改めて確

認することができた。

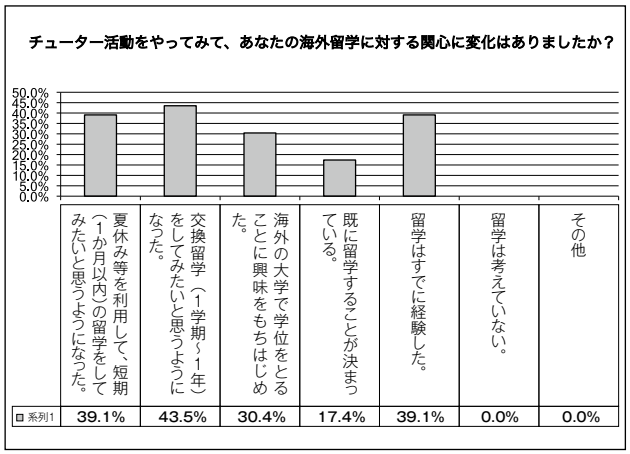
ATW のチューターに応募する学生を「留学」というキーワードを軸に分類した場合、大きく３つのグループに分けられる。

第一のグループは留学をすでに経験し、上達した外国語を使って思う存分外国人学生と交流する機会を得たいと希望する学生たちである。その多くは４年生で、就職活動も終え、比較的自由な時間が多く ATW 参加者と交流する時間も充分に確保できる。

第二のグループは留学することが決まっており、その予行演習として ATW 参加者と英語による会話、異文化交流を行いたいと考える学生たちである。

第三のグループは、留学についてはまだ深く考えたことは無いが、取りあえず面白そうだから外国人学生と交流してみたいと応募する学生たちで、低年次の応募者の多くがこれに当たる。

これら三つのグループの割合を、今年度の ATW チューター学生で見てみると、第一グループ（留学経験者）が全体の39.1％で、例年より全体に占める割合が高かった（図３）。このことは第二、第三グループに分類される他のチューター学生の留学に関する意識の変化に少なからず影響を及ぼしたのではないかと思われる。また、今回、リーダーやイベント責任者などを担当したいと自ら申し出た学生は11名にのぼったが、そのうち６名が留学経験者であった。これら留学経験者が核となってイベントの企画と運営、facebook グループの運営が行われたが、その活動に他のチューターが巻き込まれ、よい意味でのグループダイナミズムが形成されたようである。

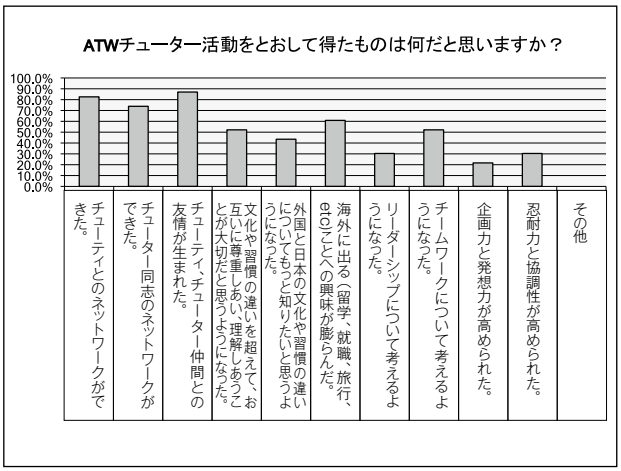


（図３）

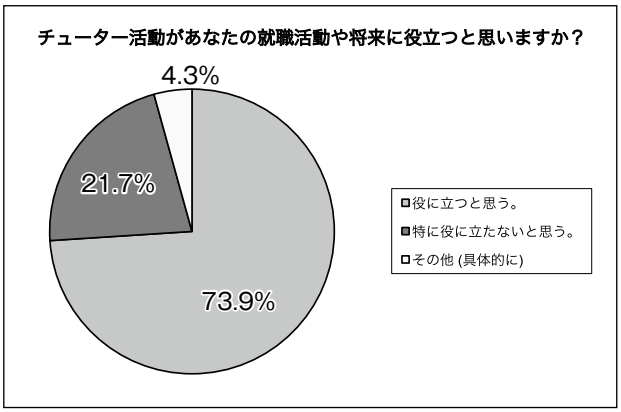
第二グループに属する学生チューターは全体の17.4％であったが、これらの学生たちは ATW 受講生との交流は当然のことながら、留学経験者であるリーダーたちから留学に関する有益な情報を詳しく聴取することもできたようである。

また、図３に見るように全 ATW チューター中、「留学は考えていない」とする群は０であることから、留学に対する強い志向は持っていなかった第三グループの学生が、ATW でのチューター活動を通して短期留学、交換留学、あるいは学位取得を目的とする留学のいずれか、もしくはそれらの複数に関心を持つようになったことがわかる。

次に、学生たちがチューター活動を通して何を得たと感じているかを見てみたい（図４）。「チューターとチューティー両方のネットワークができた、友情が生まれた」とする回答が70％～ 80％を超えて高く、文化や習慣を超えた相互理解の重要性を認識した学生も50％を超える。また、過半数（60％）の学生が海外へ出ることへの興味が膨らんだと回答している。これらをあわせ見ると、ATW生との交流で異文化交流を楽しみ、留学経験者たちとの交流もできることが相乗効果となって、短期留学、交



（図４）



（図５）

換留学への意欲を増進させていることがわかる。

さらに、チューターを経験することで、リーダーシップやチームワークに対する意識が高まり、組織のガバナンスやマネジメントに関する意識面でも成長のあったことが見てとれる。更に企画力、発想力、忍耐力、協調性についても20％～30％の学生が向上したと感じている。総合的に見て、ATW でのチューター活動が、本学の学生達に極めて好ましい効果をもたらしていると言うことができよう。

最後にチューター活動の就職への影響について学生がどのように感じているかを見てみると、（図５）に示したとおり、73.9％の学生が「チューター体験は就職活動に役に立つと思う」と回答している。具体的にどのような点が役立つと思うか、という質問に対する主な回答は、（表２）のとおりで、これらは「コミュニケーション能力の向上」「国際的視野の獲得」「組織マネジメント能力の向上」の大きく３つに分類できる。言語運用能力、コミュニケーション能力、国内外情勢への視点、広い視野、人心掌握技術、先見性、企画力等々の能力は、これから世界を舞台に活躍する人材となるべき学生達にとって必須であろう。ATW でのチューター活動を通して、これらの能力を獲得したと学生たちが感じていることは、キャンパス内でのチューター活動を通じての多文化間交流が学生の国際化に一定の効果をあげていることを物語っている。海外へ留学する本学学生を増加させることの重要性はもとより、本学キャンパスの国際化を促進することの重要性も再認識させられた次第である。

（表２）

コミュニケーション能力の向上

- 英語でのコミュニケーションを取る練習になったとともに、様々な国に興味を持ちグローバルに活躍するための第一歩になった。
- コミュニケーションをとることのむずかしさなり、重要さを考えさせられた。
- 将来は、海外と連携した仕事に就きたいと考えているので、身についたコミュニケーション力が活かせる。
- 様々な考え方を持っている人との関わり方で役立つと思う。
- 人と積極的にコミュニケーションをとる力をつけたので、人付き合いで生かせると思う。

国際的視野の獲得

- 多国籍の人との交流に際してたくさんの人との交流を通して将来に対する視野が広がった。
- 日本だけに囚われず、様々な視点を持てるようになった。
- 広い視野で物事を考えることができるようになったので、将来の幅が広がる。
- 国際性を身につけることでグローバルな人材となる。

組織マネジメント能力の向上

- スケジュールの調整、参加者との連携、気配りなど。
- 組織での役割や働き方。

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，199－206
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 199-206

マヒドン大学（タイ）との教育連携プログラムの実践

― 2013年度プログラムの実施概要 ―

岡　崎　智　己*

0．はじめに

本プログラムは教員交流（相互に行う１週間の集中講義）と学生交流（日・タイ双方で実施される２週間の現地研修）を行うことを目的に本学とマヒドン大学との間で2007年（平成19年度）から実施されているものである。以下では2013年度に実施されたプログラムについて報告する。

1．実施体制

マヒドン大学が派遣する教員によるタイ語・タイ文化の集中講義の世話役部局がこれまでの言語文化研究院から留学生センターへ変わった。このことによりマヒドン大学での日本語集中講義、マヒドン大生の受入れ（⇒本学での日本現地研修)、本学学生へのタイ語集中講義、本学学生の送出し（⇒マヒドン大学でのタイ現地研修）の全てにわたって留学生センターの教員が関わり、その準備・企画・実施の責務を負うこととなった。

マヒドン大学側の実施体制は従来通り総長室直属の国際交流課（Office of President/International Relations Division）が統括窓口となり、学生の受入れや送出し、及び教員の交換に関してはInternational College、及びFaculty of Liberal Artsと連絡・連携して行われた。九州大学における事務取扱いも、これまで通り国際交流推進室が担当した。

2．実施概要

実施されたプログラム項目の一覧を以下に示す。なお、「日本語集中講義」は実施時期からすれば前年度実施分に含まれるものであるが、これまでの報告の習慣に従ってここに記載する。また「日本現地研修」も学生の来日が3月31日（日）であったことから予算的には前年度の予算による執行であったが、同様の理由からここに記載する。

*九州大学留学生センター教授

プログラム項目	実施先	実施期間	参加者
日本語集中講義	マヒドン大学	3月18日～3月22日	マヒドン大生（7名）
日本現地研修	九州大学	4月 1日～4月12日	マヒドン大生（14名）
タイ語集中講義	九州大学	8月19日～8月23日	九大生（19名）
タイ現地研修	マヒドン大学	8月26日～9月 6日	九大生（15名）

2.1 日本語集中講義

３月18日～３月22日の５日間で２単位30時間相当の授業「Intensive Japanese Course for Communication Skills」をマヒドン大学サラヤキャンパスで行った。受講者は当初の予定から２名減って７名、全員がFaculty of Liberal Arts 所属の学生で、日本語は選択外国語として学んでいる。男子学生１名に対し女子学生６名の構成で、本来の専攻は以下の通りであった。

English（３名） Thai（１名） Science（３名）

	9 : 00 - 10 : 30	10 : 30 - 12 : 00	13 : 00 - 14 : 30
March 18	Introduction to Japanese	Introducing oneself	Asking someone to repeat something
March 19	Asking where places and things are	Inviting people to do things and turning down invitations	Continuing a conversation
March 20	Ordering food	Japanese cooking: Demonstration and tasting	Introduction to Japanese culture: Japanese tea & kimono
March 21	Making inquiries about lost articles	Explaining things and asking favors	Showing modesty and paying compliments
March 22	Apologizing	Inviting close friends to do things	Final presentations

2.2 日本現地研修

マヒドン大生14名を受入れての日本現地研修は４月１日～４月12日の２週間で行われた。今回は全員がMUIC 所属の学生で、男子学生５名、女子学生９名であった。初めて日本へ来たという学生に混じって本学来訪が２度目となる学生や国内他大学に留学中の学生も合流するなど、日本語力、日本理解に極めてばらつきが大きいことから、果たして良好なグループダイナミズムが形成されるか受入れ前は心配されたが、来日してみると学生たちは互いに譲り合い、また助け合う協調性を発揮し、グループとして大きく足並みの乱れるようなことはなかった。日本語コースに関しては従前通り２レベル・２クラス構成で授業を行った。また、これまでマヒドンプログラムに参加したことのある九大生がチューターとして待機し、九大生にとっては新学期開がちょうど始まる慌ただしい時期であった

が、各自の時間の許す限り様々な場面でプログラムに参加してもらう、あるいは「放課後」や週末の自由時間を一緒に過ごすという形で行われる「学生交流」も例年通り活発に行われた。

	Date	Seminars, language classes & other activities
1	Mar. 31	10 : 50 Arrival at Fukuoka airport 12 : 00 City tour with Japanese students
2	Apr. 1 Mon	9 : 30 Orientation to the program 10 : 00 Opening ceremony 10 : 30 Introduction to Kyushu University 11 : 00 Campus tour 12 : 00 Welcome lunch 13 : 00 - 14 : 30 Cultural Exchange : Traditional Music in Japan and Thailand 14 : 45 - 16 : 00 Japanese language class
3	Apr. 2 Tue	9 : 00 - 10 : 15 Japanese language class 10 : 30 - 11 : 45 Japanese language class 13 : 00 - 14 : 15 Workshop : Japanese Traditional Culture – origami 14 : 30 - 16 : 00 Cultural experience : Japanese kimono - fitting
4	Apr. 3 Wed	Study trip to the National Museum & the Dazaifu shinto shrine
5	Apr. 4 Th	9 : 00 - 10 : 15 Japanese language class 10 : 30 - 12 : 00 Seminar : Japanese Economy/Finance 13 : 00 - 14 : 15 Japanese language class 14 : 30 - 16 : 00 Seminar : Japanese Society/Law
6	Apr. 5 Fri	Study trip to Kumamoto Castle & Mt Aso
7	Apr. 6 Sat	Free day
8	Apr. 7 Sun	Free day
9	Apr. 8 Mon	9 : 00 - 10 : 15 Japanese language class 10 : 30 - 11 : 45 Thai students' presentations : My country - Thailand 13 : 00 - 14 : 15 Japanese language class 14 : 30 - 16 : 00 Seminar : Becoming Japanese
10	Apr. 9 Tue	9 : 00 - 10 : 15 Japanese language class 10 : 30 - 11 : 45 Japanese language class 13 : 00 - 16 : 00 Study trip to the Fukuoka City Museum & lecture on Japanese history
11	Apr. 10 Wed	9 : 00 - 10 : 15 Japanese language class 10 : 30 - 12 : 00 Seminar : Contemporary Japanese Politics 13 : 00 - 16 : 00 Study trip to Itoshima peninsula and Kyushu University Ito campus

	Date	Seminars, language classes & other activities
12	Apr. 11 Th	9 : 00 - 10 : 15 Japanese language class 10 : 30 - 12 : 00 Seminar : Migration and Multiculturalism in Japan 13 : 00 - 16 : 00 Cultural experience : Tea ceremony (ochakai) at the Rakusuien Japanese garden
13	Apr. 12 Fri	9 : 00 - 10 : 15 Japanese language class 10 : 30 - 11 : 45 Program evaluation 13 : 00 - 14 : 15 Thai students' presentations : "The Japan I discovered" 14 : 30 Closing ceremony 14 : 45 Farewell party
14	Apr. 13 Sat	11 : 50 Departure from Fukuoka airport

2.3 タイ語集中講義

タイ語の集中講義は今年も全学教育・総合科目「タイの言語と文化」（２単位）として開講され、Faculty of Liberal Arts からタイ人講師を迎えて８月19日～８月23日の期間で行われた。受講者はタイ現地研修に参加が決まった15名に集中講義のみの受講希望者４名を加えた計19名であった。その内訳は以下の通りである。

21世紀プログラム（２名） 医学部（３名・看護学科２名を含む）
教育学部（１名） 芸術工学部（１名） 工学部（１名） 農学部（３名）
文学部（２名） 法学部（２名） 理学部（２名） 経済学府（１名）
生物資源学環境科学府（１名）

	10 : 30 - 12 : 00	13 : 00 - 14 : 30	14 : 50 - 16 : 20
Day 1	Introduction to Thailand and Mahidol Univ.	Introduction to Thai Language	- L.1 Introducing oneself and others - Assignment to be presented on day 5
Day 2	- Test 1 - L.2 Asking question to describe things	- L.2 (continued) - Numbers 1-10 - L.3 Telling the Time	- L.3 (continued) - introducing Thai Food to be cooked on day 3
Day 3	Demonstration of Thai Cooking	- Test 2 - Thai holidays - Thai traditional Festivals - Buddhism	- L.4 Direction and destination
Day 4	- Test 3 - L.5 Asking price / Adj.	- L.5 (continued) - Writing Thai Alphabet and students' name	- L.6 ordering Food
Day 5	- Vocabulary Test - Preparation for 2- page report, oral presentation and introducing oneself (using advanced language form)	- Introducing oneself (using advanced language form) - Role Play - Oral Presentation	- Thai Manners (Do and Don't) - Conclusion

2.4　タイ現地研修

定員（15名）を超える応募があったため書類選考を行い、今年の参加者15名を決定した。大学院生２名を含む男子学生６名と学部在学の女子学生９名で、その内訳は以下の通りである。

21世紀プログラム（１名）　医学部（３名・看護学科２名を含む）
芸術工学部（１名）　工学部（１名）　農学部（３名）
文学部（１名）　法学部（２名）　理学部（１名）　経済学府（１名）
生物資源学環境科学府（１名）

旅行保険の加入を義務付け、出発前（本学）と現地到着後（マヒドン大）の２回、オリエンテーションを行い、安全管理体制の徹底をはかるとともに本プログラムの意義についても十分に理解してもらうよう努めた。実施期間は８月26日～９月６日で、学生たちはタイ語の集中講義の受講を終え、その週末にはタイへ飛んでの現地研修となった。なお、これまで使ってきたキャンパス内の宿泊施設が改修工事のため使えず、今年は民間の会社が経営する学外の学生寮（http://www.bunditapartmentgroup.com/index.html）が宿泊先となった。

現地スタッフの都合等からプログラム内容の実施日時が一部変更されることはあったが、凡そ以下に示す内容で研修が行われた。これまで同様、日本語を学んでいるマヒドン大の学生がタイ語の学習はもとより、キャンパス内でも外でも常に影のごとく付き添って、実に良く九大生のアシストをしてくれた。幸い、今年の参加者はケガをしたり事故にあったりといったアクシデントもなく、全員が無事に元気で２週間の研修を終えて帰国した。

Date	Morning (9：00 - 12：00)	Afternoon (from 13：00)
Sun 25 August	Leave Fukuoka	Arrive in Bangkok & tour of Tesco Lotus
Mon 26 August	Orientation and campus tour	Thai language class 1
Tue 27 August	Study tour 1: Temple tour (full day)	
Wed 28 August	Thai language class 2	Cultural class 1: Thai sweets & garland making
Th 29 August	Thai language class 3	Study tour 2: Bangkok National Museum
Fri 30 August	Thai language class 4	Study tour 3: Museum of Siam
Sat 31 August	Free day	
Sun 1 September	Free day	
Mon 2 September	Thai language class 5	Cultural class 2: Thai dancing
Tue 3 September	Thai language class 6	Study tour 4: Jim Thompson House

Wed 4 September	Thai language class 7	Presentation on Japanese culture by KU students
Th 5 September	Thai language class 8	Cultural class 3: Thai cooking
Fri 6 September	Final exam	Presentation in Thai and farewell dinner
Sat 7 September	Free day / Leave for Fukuoka	

3　参加学生によるプログラムの評価

研修終了後に本学が実施したアンケート調査の結果の概要を以下に示す。

3.1　日本現地研修に対する学生評価

参加者14名・回答者14名

Japanese Language Course	Excellent	Good	Fair	Poor
Content	12	2	nil	nil

	Too many	Many	Appropriate	Few	Too few
Class hours	1	2	10	1	nil

Seminars & Workshops	Excellent	Good	Fair	Poor
Seminar/Workshop 1	9	5	nil	nil
Seminar/Workshop 2	3	8	3	nil
Seminar/Workshop 3	8	6	nil	nil
Seminar/Workshop 4	8	5	1	nil
Seminar/Workshop 5	9	3	2	nil
Seminar/Workshop 6	6	6	2	nil

Cultural Experiences	Excellent	Good	Fair	Poor
Cultural Exchange	12	2	nil	nil
Cultural Experience 1	8	6	nil	nil
Cultural Experience 2	14	nil	nil	nil

Study Trips	Excellent	Good	Fair	Poor
Kyushu National Museum & Dazaifu shrine	13	1	nil	nil
Fukuoka City Museum	9	5	nil	nil
Kumamoto & Mt Aso	14	nil	nil	nil
Ito Campus & Itoshima peninsular	8	5	1	nil

その他	Excellent	Good	Fair	Poor
Tutors（＊無回答者１名）	13	nil	nil	nil
Staff members	14	nil	nil	nil
Overall satisfaction	7	7	nil	nil

以上の学生評価から分かるように、総じて参加者にとって満足の得られる日本研修を行うことができた。ただ、今年は実施時期の関係から民間の学生寮１カ所で必要な部屋数を確保できず、男女別々の寮を宿泊先とすることになった。特に女子学生の宿泊先となった寮は本学への通学にはやや遠く（バスで約35 ～ 40分）、かつ施設も年数を経た古いものだったことから学生には不評だった。その他、寮の個室には入浴施設がなく共同浴場を使わなければならなかったことも、そうした習慣を持たないタイの学生（の一部）には苦痛だったようだ。また、宗教的制約から食べられない食材（今回は牛肉）があるのに、選択の余地なく全員が同じものを食べなければならない寮の食事のシステムに不便、不満を感じた学生もいた。そうしたことも含めて「日本体験」と言えば言えなくもないのかもしれないが、考慮し、改善すべき点であろう。とは言え、現時点では民間の学生寮で宿泊先を確保するしか手立てがなく、改善したくてもなかなか難しいことも事実である。

３.２　タイ現地研修に対する学生評価

参加者15名・回答者15名

	とても良かった	良かった	どちらとも言えない	良くなかった	まったく良くなかった
研修全体	15	nil	nil	nil	nil
タイ語クラス	6	7	2	nil	nil
Study tours	10	5	nil	nil	nil
Cultural classes	14	1	nil	nil	nil
寮・生活一般	11	4	nil	nil	nil
実施時期・期間	13	2	nil	nil	nil

研修プログラム全体に関しては、参加者全員が一人の例外もなく「とても良かった」という高い評価で、今年の研修は極めて良好に行われたと言ってよかろう。学生から寄せられたコメント見ると、タイ語の集中講義（５日間・30時間）を受講した上で現地研修に赴くという研修スタイルも高い評価を得た要因の一つになっていることが分かるが、なんと言ってもマヒドン大学の現地スタッフ、及びチューターとして親身になって九大生のケアをしてくれたマヒドン大生の献身的とも言える対応が何よりも参加学生の印象を深めたようである。

なお、現地でのタイ語のクラスに関して若干評価が分かれているのは、日本での事前集中講義を担当した教師と違った教授スタイルに戸惑った学生がいたということ、及び Study trips や Cultural classes といったタイ語以外の活動との時間的、あるいは体力的調整がうまくできない学生がいたと

いうことに起因しているようである。

4　今後の展開

マヒドン大学の学年歴が変わることを受けて、本プログラムの実施時期につての再検討が必要となり、関係者が一同に会して協議した結果、来年（2014）度に関しては凡そ以下の日程でプログラム各項目を実施することになった。

プログラム項目	実施先	実施担当	実施時期
日本語集中講義	マヒドン大学	九州大学	2014年７月～８月
日本現地研修	九州大学	九州大学	2014年８月
タイ語集中講義	九州大学	マヒドン大学	2014年８月
タイ現地研修	マヒドン大学	マヒドン大学	2014年８月～９月

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，207－213
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 207-213

日本語・日本文化研修コース（13 期生）報告

Report on Japanese Language and Culture Course (JLCC 2012-2013)

郭　　俊　海*

1．はじめに

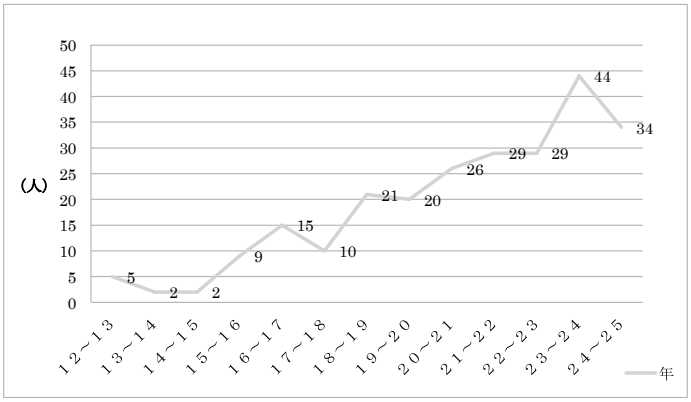
九州大学留学生センターの日本語・日本文化研修コース（JLCC: Japanese Language and Culture Course）は、海外の大学で日本語や日本文化を専攻した学部生を対象とし、今後の日本研究に必要となる日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深めることを目的とした１年間の短期留学コースである。

2．概要

平成12年度から、日本語・日本文化研修生は一括して留学生センターが受け入れ主体となっており、最近までの受け入れ人数は次のグラフのとおりである[1]。

平成16−17（04−05）年度５期生　15名　　平成17−18（05−06）年度６期生　10名
平成18−19（06−07）年度７期生　21名　　平成19−20（07−08）年度８期生　20名
平成20−21（08−09）年度９期生　26名　　平成21−22（09−10）年度10期生　29名
平成22−23（10−11）年度11期生　29名　　平成23−24（11−12）年度12期生　44名
平成24−25（12−13）年度13期生　34名

表１　平成12−25年度の JLCC 生の受入人数の推移



*九州大学留学生センター准教授

1　平成12 ～ 23年度の受入人数は清水（2007，2011）によるものである。

2.1　受け入れ期間　その年の10月１日から翌年の９月30日まで

2.2　13期生の国籍と出身大学

表２は13期生の国籍と出身大学を示す。13期生は、17カ国・地域の29大学から計34名が参加している。うち、奨学金受給者は、国費が13名（大使館推薦11名、大学推薦２名）、JASSO が５名、ASEP[2] が２名である。以下は平成24年度のコースの概要である。

表２　13期生の国籍と出身大学

国・地域		大学名	人数
アジア	韓国	慶尚大学校	1
		忠南大学校	1
		東亜大学校	1
		中央大学校	1
		慶北大学校	2
		清華大学**	1
	シンガポール	シンガポール国立大学	1
	タイ	タマサート大学	2
	台湾	台湾大学	1
	中国	吉林大学	1
		清華大学	1
		復旦大学	1
		同済大学	1
		華中科技大学	2
	ベトナム	ハノイ国家大学外国語大学	1
		ハノイ国家大学人文社会科学大学	1
	香港	香港中文大学	1
欧米	アメリカ	ボストン大学	1
		ワシントン大学	1
	オランダ	ライデン大学	1
	グルジア	トビリシ自由大学	1
	スイス	チューリッヒ大学	1
	スロバキア	コメニウス大学	1
	デンマーク	オーフス大学	1
	ドイツ	ルートビッヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン	1
	フランス	国立東洋言語文化大学（INALCO）	1
		プロヴァンス大学	2
	ポーランド	ヤギエウォ大学	1
ロシア		サハリン国立大学*	2
計			34

*　３月に修了帰国
**中国の清華大学に在籍する韓国人留学生

2　ASEP（Asian Student Exchange Program）は、九州大学とアジアの主要な大学（ASEP の協定を締結した大学）との間の交換留学を目的としたものである。

2.3　コースの内容

JLCC のコースは、必修科目、選択科目から構成される。コースの修了には、20単位（450時間）が必要である。

1）　必修科目　16 単位（390時間）　留学生センター開講の「上級日本語（JS: Japanese Social Studies）」、「日本文化論（JC: Japanese Culture Studies）」、「文献講読（Independent Study Project）」。「上級日本語」と「日本文化論」はそれぞれ年間10単位以上、４単位以上の履修が必要である。詳しくは表３のとおりである。

2）　選択科目　４単位（60時間）以上　日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業

表３　JLCC の13期生のカリキュラム

	秋学期（10 月 - 3月）	春学期（４ 月 - 9月）
必修科目	上級日本語（JS: Japanese Social Studies）（10単位以上）	
	（６単位以上） JS101　現代日本における若者論 JS102　社会問題にみる日本社会① JS103　現代日本の姿 JS104　ドラマで学ぶ日本の歴史 JS105　日本語総合力をつけよう JS106　４コマ漫画にみる日本① * JS107　人と社会を考える* （各１単位／ 30時間）	（４単位以上） JS201　日本人論と日本社会の変化 JS202　社会問題にみる日本社会② JS203　雑誌を見よう、読もう JS204　現代文読解演習 JS205　現代の小説を読もう JS206　４コマ漫画にみる日本② （各１単位／ 30時間）
	日本文化論（JC: Japanese Culture Studies）（４単位以上）	
	JC101　日本語学入門 JC102　日本語演習 JC103　日本語日本文化概論 A JC104　日本映像文化論 A （各２単位／ 30時間）	JC201　日本語教育学 JC203　日本語日本文化概論 B JC204　日本映像文化論 B （各２単位／ 30時間）
		ISP　文献講読 （２単位／ 30時間）
選択科目	（4 単位以上） 各学部等が開講する日本の社会や文化等に関する学部学生向け授業	

* 1 月から開講

表４　秋学期の時間割

時限　　時間	火	水	木	金
1　08：40 -10：10	JS101　大神			JS105　疋田
2　10：30 -12：00	JS102　鹿島		JS103　西頭	
3　13：00 -14：30	JS106　和田	JS104　小山	JS106　和田	JC101　岡崎
4　14：50 -16：20			JC102　津崎	
5　16：40 -18：10	JS107　西頭	JC103　郭	JC104　川邊	JS107　西頭

表５　春学期の時間割

時限　　時間	火	水	木	金
1　08：40 -10：10	JS201　大神		JS203　西頭	JS205　疋田
2　10：30 -12：00		JS202　鹿島		JC203　郭
3　13：00 -14：30	JS204　岡崎	JC201　小山		JC101　岡崎
4　14：50 -16：20				
5　16：40 -18：10	JS206　和田	ISP　郭	JC204　川邊	ISP　郭

2.4　単位認定

本コースで履修した科目は、成績認定が行われ、所定の要件を満たすと修了証が授与される、また単位互換に応じることができる。

2.5　第13期生の年間主要行事

以下は13期生の年間主要行事である。

９月24日（月）～ 27日（木）	JLCC 生来日
28日（金）	オリエンテーション＆新入留学生オリエンテーション
10月１日（月）	全学授業開始
	平成24年度秋季入学式・外国人短期留学プログラム開講式
	JLCC・JTW 合同図書館ツアー＆ JLCC・JTW 合同懇親会
３日（水）	日帰り見学旅行（熊本城・阿蘇山）
４日（木）	個別面談＆福岡市防災センター体験学習
５日（金）	個別面談
16日（火）	JLCC 授業開始
12月10日（月）	JLCC・JTW 長崎原爆見学
15日（土）	糸島東風公民館交流会
2013年１月８日（火）	JLCC １月開講の授業開始
15日（火）	二回目の個別面談
21日（月）	JLCC・JTW・研修コース「長崎原爆シンポジウム」
２月４日（月）	香椎第一中学校国際交流会
28日（火）	１月開講の JLCC 授業終了
４月５日（金）	大分（日田市）見学旅行
16日（火）	春学期の JLCC の授業開始
８月２日（金）	JLCC の授業終了
６日（火）	閉講式・パーティー

2.6　文献購読

春学期の必修科目の「文献購読」は、各自が興味のある本（日本に関する内容）を一冊選び読み通し、２週間に一回読書レポートを書く。提出したレポートをもとに口頭報告を行い、そして学期末に最終レポートを提出する。以下は、学生たちのレポートのテーマである。

言語・文学などに関するもの

1	陸セーミ	「ことば」について
2	ハンセン・ラスムス	日本の若者の生活状況と生活意識
3	ミゼル・ポー	外国語が母語である人はどのように「です・ます」の遣い方を捉えるのか
4	レーヂェゥ・ホア	偶然のチカラ
5	王亦程	日本のジャーナリズムは大丈夫か？
6	チンティホン・ニュン	敬語表現
7	キム・ブヨン	なぜ宝塚歌劇の男役は格好いいのか
8	タリク・ミハウ	人間は言葉を理解し切れるのか
9	イ・ボミ	日本人から作られたやまと言葉
10	イ・セビッ	日本語にはどのような日本人の考え方や物事の見方が含まれているのか
11	白ジンソル	日本人のコミュニケーションの理解について
12	ニールス・ファン・デル・サルム	明治時代における西洋古典文学論
13	陳良諺	弓道における矛盾— 禅とスポーツの狭間 —
14	キム・ジナ	日本社会では必ず空気を読まなければならないのか
15	古　筝	幸せな人になるため
16	カン・ギュミン	外国語に憧れる日本人

社会・文化・宗教などに関するもの

17	田暁涵	矛盾する団塊世代
18	ジューン	日本の個性は何か
19	キム・ボヨン	なぜ若者は「就職」できなくなったのか
20	パーン	なぜ日本人は外国人を受け入れないのか
21	テブドラッシュヴィリ・マショ	なぜ日本は「無言社会」となったのか
22	李晨立	民俗宗教の比較ー日本神道と中華道教を中心にー
23	ロ・アン	日本におけるニート
24	バザン・可憐	歴史はどんな影響を与えたのだろうか？

政治・経済などに関するもの

25	廖康寧	日本はなぜTPPに参加すべきではないか
26	ハナ	国民の形成と明治憲法
27	レア・マイヤー	世界経済で生き残るための日本の変化すべきこと
28	アレクサンダー・シャピロ	放送禁止歌と日本の検閲
29	ベギッチ・エミーナ	日米地位協定を改正すれば在日米軍の問題が解決できるか
30	サカルド・ヴァネサ	長崎への原子爆弾投下とその結果
31	李キンキン	消費税増税の影響

※（未提出者１名、サハリン国立大学の２名が３月に修了帰国したため、計31名）。

３．第13期で行った改良

授業の取り方については従来通り、秋学期に留学生センターが開講する各種のスキル別コース（会話、漢字、読解、作文など）を受講させるとともに、必修の上級日本語の一部の開講時期を遅らせ（１月開講、週２回行う方法）、10月来日からの３か月は、足りない日本語の力をつける猶予期間を設けた。これによって、非漢字圏学習者はもちろん、漢字圏学習者にも留学生センターが開講する多くの読み書きの授業に慣れさせ、日本語力を伸ばせるのに効果的であった。

学生のニーズに応えつつ授業の質を担保するために、必修科目を従来の「日本語（上級）」と、それまで必修科目として開講していた「日本語・日本文化概論」、「日本語学」及び「日本語演習」を新たに開講する日本の社会や文化（言語含む）に関する授業とともに「日本文化論」として再編し、その授業を選択制とした。また授業の内容と形態の整理を行い、日本の社会・文化に関する理解の深化を目的とする「日本文化論」の科目を２単位にした。

12期の試みを踏襲し、一部の授業でiPadの導入を継続した。グループディスカッションやハンズオンタスクの実施において、学生が言葉や漢字などを互いに教えあったり、iPadのWifiやカメラ機能を使って情報を即時に共有したりすることで、学生間の交流やコミュニケーションが促進できて、教室活動も効果的であった。

学生の指導においては、授業が始まる前（10月１週目）と秋学期の終わる前（１月３週目）に、２回にわたってJLCC生全員を対象に一人ずつ個別面談（郭と事務担当の横松さん）を行った。面談を通じて、学生の来日後の適応状況や生活上・勉強上の問題点などを迅速に把握し、スムーズな問題解決につながった。

４．コースに対する評価

春学期の「文献購読」の最後の授業時と９月の初めに、JLCC生によるプログラム評価の報告会を行い、カリキュラムの構成、授業内容、授業開始時期、見学旅行及び今後の改善点の五つの面から、「非常に良い」「良い」「どちらとも言えない」「あまり良くない」「良くない」と５段階評価で評価して

もらった（回答者30人）。カリキュラムの構成、授業内容、授業開始時期について、「非常に良い」「良い」と回答した人が27人（90％）だった。しかし、必修科目の「文献購読」と「上級日本語」の一部について、授業の難易度や課題の量が多かった割りに、「単位数が少なすぎる」「負担が重すぎる」との指摘が多かった。また、「学部の授業がもっと簡単に取れるようにしてほしい」との意見もあった。特に、見学旅行については、「日本文化を体験できる機会が少ない」「見学旅行や日本人との交流活動をもっと増やしてほしい」という指摘が多かった。

5．今後の課題

13期生は17カ国・地域の34名だった。全体的によくまとまっており、真面目で勤勉なグループだった。日本語・日本文化研修コース生は、大学での研究や社会生活での高度な日本語運用力を身につけることが目的の一つであるが、最近彼らの関心や興味は、日本語よりも日本文化や日本社会一般に移りつつあるようである。彼らは、「留学生センターで開講される日本語や日本文化に関するクラスだけでは満足できず、学部の科目を多く履修したがる傾向が更に多くなってきた（清水　2011）。また、九州大学留学中に、日本語・日本文化研修コースの授業以外に、できるだけ多くの授業を取り単位を持って帰りたいという声が上がってきている（郭　2013）。今後、上記のような学生たちのニーズや期待に応えるために、日本語・日本文化研修コースの位置づけを見直し、カリキュラムの継続的な開発・改善をしていかなければならない。

また、プログラム期間中に、日本での就職活動をした学生もいた。今後、日本での就職を希望する学生に対するアドバイスや就職活動へのサポートをどう提供すべきかが、新たな課題となっている。

参考文献

清水百合（2007）「日本語・日本文化研修コース」『九州大学留学生センター紀要』第16 号
清水百合（2011）「日本語・日本文化研修コース」『九州大学留学生センター紀要』第19 号
郭　俊海（2013）「日本語・日本文化研修コース」『九州大学留学生センター紀要』第21 号

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，215－221
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 215-221

九州大学における春季プログラムの実践

― AsTW（Asean in Today's World）の概要と今後の課題 ―

Report on the Asean in Today's World (AsTW) 2013

郭　　俊　海*

高　原　芳　枝**

０．はじめに

ASEAN in Today's World (AsTW) は、本学が開発した ASEAN 諸国の有力大学と共同で現地の大学において実施する、ASEAN ＋３（日中韓）にフォーカスした短期国際教育プログラムである。本稿では、アテネオ・デ・マニラ大学と2013年２～３月に共同実施したプログラムの概要を報告し、その問題点や今後の課題について考察する。なお、本プログラムは、2009年～ 2011年まで共同実施大学であったマヒドン大学インターナショナルカレッジ（MUIC)、及び福岡女子大学の協力を得て実施した。

１．概要

１．１　コース実施期間（２月22日～ ３月８日　15日間）

日本の大学（九州大学も含む）と諸外国の大学の休業期間を考慮し、実施期間を2013年２月22日（金）から３月８日（金）の２週間とした。２月22日（金）～ 24日（日）のオリエンテーションを経て、２月25日（月）から授業を開始した。

１．２　対象と募集方法

主として ASEAN 域内の大学、日本、中国、韓国の大学の学生（学部生と大学院生）を対象とするが、他の地域の学生にも門戸を開いている。募集は、共同実施大学である本学とアテネオ・デ・マニラ大学が其々のルートを通じて行った。

１．３　参加者

表１は、参加者の国と大学を示したものである。７カ国・地域の12大学から41名の学生が参加した。

*九州大学留学生センター准教授
**九州大学国際交流推進室准助教

表１　参加者の国と大学

日本（24名）	ASEAN 諸国（17名）					
日本	インドネシア	カンボジア	タイ	フィリピン	ベトナム	マレーシア
24	3	2	3	4	3	2
福岡女子大学 九州大学	University of Gadjah Mada Binus University of Indonesia	Royal University of Phnom Penh	Chulalongkorn University Mahidol University	Ateneo de Manila University	Vietnam National University Hanoi Vietnam National University, Ho Chi Minh City	Multimedia University Universiti Malaysia Sarawak

１．４　宿舎、参加料金と奨学金

宿舎は、アテネオ・デ・マニラ大学指定の学生寮を、１室２～４名で利用した。九州大学の学生以外の参加者からは九州大学の授業料59,200円と宿舎料とフィールド・スタディに要する実費の73,800円をと徴収したが、アテネオ・デ・マニラ大学（４名）と福岡女子大学の学生（６名）については授業料不徴収とした。九州大学の学生から授業料を除き、宿舎料とフィールド・スタディ費を徴収した。

財政支援として、九州大学は14万円を15名の ASEAN+ ３諸国（日本を除く）の学生に支給した。国内の学生に関しては、JASSO（日本学生支援機構）ショートビジット奨学金対象プログラムに選抜されたため、九州大学と福岡女子大学の参加学生24名全員に機構による８万円の奨学金を支給することができた。

２．カリキュラムとコース概要

このプログラムは、① ASEAN 研究（ASC: ASEAN Studies Courses）、②アジア言語・文化（ALC: Asian Languages & Cultures Courses）、③フィールド・スタディから構成され、ASC ３科目、ALC ５科目を開講した。① ASC と② ALC の各科目は２単位とし、参加者は４単位（ASC １科目＋ ALC １科目＝２科目）を履修して、プログラムを修了する。

① ASEAN 研究コース／ ASEAN Studies Courses（ASC）
- ◇ ASEAN・東アジア事情／ Current Affairs of ASEAN and East Asia
- ◇ ASEAN 経済／ ASEAN Economics
- ◇ アジアの異文化コミュニケーション／ Cross-Cultural Communication in Asia

② アジア言語・文化コース／ Asian Languages & Cultures Courses（ALC）
- ◇ 初級日本語／ Basic Japanese Language and Culture
- ◇ 中級日本語／ Practical Japanese Language and Culture
- ◇ 初級タガログ語／ Basic Filipino Language and Culture
- ◇ 初級インドネシア語／ Basic Bahasa Indonesia Language and Culture
- ◇ 初級中国語／ Basic Chinese Language and Culture

③ フィールド・スタディ他
- ◇ Villa Escudero Resort, San Pablo City
- ◇ Subic, Zambales/Pampanga
- ◇ 伝統工芸体験

④ ゲストレクチャー

Mr. Ky-Anh Nguye（ASEAN 事務局社会文化協力副局長）特別講演会

表２　時間割

ALC 9:30-11:45
Lunch Break
ASC 13:30-15:50

ALC: Asian Languages & Cultures Courses　　ASC: ASEAN Studies Courses

表３　ASEAN 研究コース科目担当教員・受講者数

科目名・講師 （　）内は担当コマ数（1コマ＝180分）	受講者数
ASEAN・東アジア事情／ **Current Affairs of ASEAN and East Asia** ◇ Dr. Panlavee Boonpongsa, Mahidol University International College（4） ◇ Assoc. Prof. Mark Fenwick, Faculty of Law, Kyushu University（5）	19
ASEAN 経済／ **ASEAN Economics** ◇ Assoc. Prof. Shoji Shinkai, Fukuoka Women's University（4） ◇ Prof. Victor S. Venida, Ateneo de Manila University（5）	8
アジアの異文化コミュニケーション ／ **Cross-Cultural Communication in Asia** ◇ Prof. Jordan Pollack, International Student Center, Kyushu University（4） ◇ Prof. Violet B. Valdez, Ateneo de Manila University（5）	14

アジア言語・文化コース科目担当教員・受講者数

科目名・講師（担当コマ数）	受講者数
初級日本語・文化／ **Basic Japanese Language & Culture** ◇ Ms. Kyoko Takada, International Student Center, Kyushu University（10）	9
中級日本語・文化／ **Practical Japanese Language & Culture** ◇ Prof. Tomomi Okazaki, International Student Center, Kyushu University（5） ◇ Assoc. Prof. Junhai Guo, International Student Center, Kyushu University（5）	3
初級フィリピン語・文化／ **Basic Filipino Language & Culture** ◇ Mrs. Maricar Delos Santos-Pulvera, Filipino Department, School of Humanities, Ateneo de Manila University（10）	14
初級インドネシア語・文化／ **Basic Bahasa Indonesia Language & Culture** ◇ Dr. Herman Frits Pangemanan, Department of Modern Language, School of Humanities, Ateneo de Manila University（10）	4
初級中国語・文化／ **Basic Chinese Language & Culture** ◇ Ms. Daisy C. See, Chinese Studies Program, School of Social Sciences, Ateneo de Manila University（10）	11

3．日本からの参加学生に見られるプログラムの成果・効果

帰国後に、九州大学と福岡女子大学の参加者によるプログラム評価のアンケートを行った。評価はプログラム全体とコース内容について５段階の基準（５＝とてもよかった、４＝よかった　３＝どちらとも言えない　２＝つまらなかった　１＝非常につまらなかった）で評価させ、各質問項目について、必ずコメントを書かせるようにした。表４は五段階評価ポイントを集計したものである。

表４　日本からの参加者によるプログラムの評価（回答者数：17人／24人）

（とてもよかった）　→　→　→　つまらなかった）

	5	4	3	2	1
プログラム全体	13名	3名	1名		
ASEAN 研究コース	11名	6名			
アジア言語・文化コース	6名	8名	2名	1名	

表４の通り、「とてもよかった」「よかった」と回答した学生が多かったため、プログラム全体、ASEAN 研究コースおよびアジア言語・文化コースに対して、ほとんどの学生が満足していることが分かる。

◎　ASEAN に関する関心の深まり

ASEAN 地域の一国に身を置き、ASEAN についての基礎知識を得ながら ASEAN 諸国の学生ととも

に学び、その国の同世代の言葉に耳を傾けることで、学生は、ASEAN の政治・経済的情勢、歴史、言語や文化など、アセアン全般にわたっての興味を深めた。アンケートには、次のような感想が述べられ、ASEAN に関する関心の深まりが示されている。

> この授業を受ける前まで ASEAN について、その加盟国しか知らなかったが、ASEAN の基本理念・特徴の学習や EU や NAFTA などの他の連合との比較を通して、アジアと西洋の考え方の違いやなぜ統合したのかなどの知識を得ることができた。また、帰国した今、自分の視野の狭さ、知識不足からもっと ASEAN について知りたい、勉強したいと強く思うようになった。

更に、授業の中で学生たちは ASEAN について自らの考えを述べあったり、自国のことを紹介し他の学生の意見を聴くなどして、ASEAN や自国について再認識できたと多くの学生が述べている。また、ASEAN 諸国からの学生達が授業に積極的に参加して、よい刺激になったという感想や、自国を背負っていく世代としてもっと努力しなければならないと思った、という感想も聞かれ、学生の意識の向上が認められた。

◎　英語コミュニケーション能力の向上

参加学生からは次のような感想が聞かれ、英語コミュニケーション能力の面でもプログラムの効果が認められた。

> 英語を話す頻度は他の短期英語研修に比べて AsTW の方が圧倒的に多かった。自分たちが積極的に意見を述べるためにも、もっと英語によるコミュニケーション能力を高めなければならないと思った。アジア諸国の同世代の人と共に生活することで、英語を話す機会が多く得られたし、彼らから刺激を受けてもっと英語の勉強を頑張ろうという向上心に繋がった。自分が今持っている英語力をどうにか駆使してコミュニケーションする姿勢を鍛えることができた。

◎　ASEAN、日本理解及び異文化理解の促進

このプログラムに参加したことを通じて、学生はアジア言語に関する言語的スキルが向上しただけではなく、ASEAN の政治的経済的情勢、歴史、言語、文化及び食の安全など、アセアン全般にわたって理解することができた。授業では、学生たちは ASEAN について自らの考えを述べる、また自国のことを紹介し他の学生の意見を聴くなどして、自国とアセアン諸国の間の考え方や生活状況の違いを知り、国際理解が深められ、自国のことについて再認識ができた。２週間にわたってともに学び生活することを通じ、親しい友人関係のネットワークを築き、今後目指すべき目標がより明確になった。「参加する価値は高く、本当にもう一回参加したいほどよい研修であることは間違いない」と述べている学生もいた。

◎　日本人学生のコミュニケーション能力とアイデンティティ意識の向上

多くの日本人学生が、ASEAN の学生とともに生活し学ぶことや、教室でのディスカッションなどを通じて、自分たちが積極的に意見を述べ、もっと英語によるコミュニケーション能力を高め、今後より明確な目標を持ち努力しなければならないという意識が高められた。以下は、抜粋した日本人学生のコメントの一部である[1]。

1．海外の学生の意見を聞きながら学べたため勉強になった。
2．少人数のクラスでディスカッション形式だったのもとても刺激的でよかったと思います。
3．帰国した今、自分の視野の狭さ、知識不足からもっと ASEAN について知りたい、勉強したいと強く思うようになった。
4．他国の人たちと一緒に授業を受けることで価値観や ASEAN に対する考え方の違いに気付くことが出来た。
5．日本とは異なるアジアの文化を学ぶことができて、とてもためになった。これからの自国とアジアの関わりを考えるきっかけにもなった。
6．アセアンの国からの学生達が授業に積極的に参加していい刺激になった。
7．諸国に友達を作ることができたのは非常に大きく、研修中も本当に多くのことを語り合うことができた、貴重でかけがえのない経験であった。
8．アジア諸国の同世代の人と共に生活することで、ほかの研修の時よりも英語を話す機会は多かったし、彼らから刺激を受けて、もっと英語の勉強を頑張ろうという向上心にもつながったと思う。
9．様々な国からの学生と英語で話す機会があるというところは、非常に優れていた点だと思います。

しかし、これまでと同様に、過密なスケジュール、特に週末のフィールド・スタディに対して「もっと自由な時間がほしい」との声があった。毎日、午前９時30分から午後４時まで授業がびっしり入っている。そのほかに週２回程度は授業終了後、夕方や週末のフィールド・スタディも用意されていた。また、ASEAN 研究コースの前半終了後に、学生たちが各種の課題をこなす時間も必要だった。特にプログラムの最終日にはテストや試験を行うクラスもあったため、学生が自由に使える時間は極めて限られていた。また、宿泊した宿舎や教室、キャンパス内には、Wi-fi やインターネットアクセスの不具合が頻発するなど、インターネットが使える環境がもっとほしいという意見も寄せられている。また、今回も日本人学生の参加者が多かったため、日本人学生数を減らしアセアンの学生を増やしてほしいとの指摘もあった。学生の主なコメントをまとめると、おおむね次のとおりである。

1．日本人（九大、女子大）の参加者が多く、ASEAN 諸国との釣り合いが取れていない。
2．もっと授業数が多ければもっと深く学ぶことができるのにと思いました。
3．フィールド・スタディの回数をもう少し減らすべきだと思う。

1　アセアンの学生のコース評価は、これまでの集計方法と違っていたため、回答者のコメントについては抽出していない。

4．ほとんど文系科目のコースだったので、理系科目のコースがあったらおもしろいかもしれない、と思った。

4．今後の課題

本年度も、日本の大学（九州大学も含む）と諸外国の大学の休業期間を考慮し、開催期間の微調整を行い、２月22日～３月８日までの２週間とした。それにもかかわらず、一部の地域の大学（たとえば、香港、シンガポールなど）の授業期間と重なり、これらの地域の大学からの参加者はいなかった。また、経済事情などにより、ミャンマーやラオスからの参加者はいなかった。

プログラムの開講期間に関しては、前年度と同じく、「短すぎる」、「３～４週間にすべきだ」との意見も参加した学生から寄せられている。しかし、期間を伸ばせば滞在費や授業料及び講師の謝金などの経済的な問題や、また共同開催校の新学期と重なり教室や宿泊などの施設の利用が困難になるなどの問題が出てくる。今後も、共同開催校の事情を考慮しながら開催時期やコースの長さを検討していきたい。

日本人学生の参加者からは「日本人が多すぎる」との意見があった。アセアンの一部の国は、奨学金がないと経済的に参加しにくい実情がある。より多くのアセアンの学生の参加を実現するには、いかに財源を確保するかが重大の課題の一つである。また、「理工系向けの授業があったら」という声もあった。これらの意見を、今後カリキュラムの改善に活かしたい。

※謝辞

本プログラムの実施にあたって、日本人学生参加者を対象に、本学人間環境学府の竹熊尚夫教授によるアセアン事情のゲストレクチャーをしていただきました。ここに記してお礼を申し上げます。

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，223－233
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 223-233

九州大学留学生のための日本語コース（JLCs）

Japanese Language Courses for International Students（JLCs）

斉　藤　信　浩*

１．コース概要

日本語補講コース（Japanese Language Courses：以下 JLCs）は九州大学留学生センターに所属する各プログラム（研修コース、日本語日本文化研修コース、日韓理工系プログラム、福岡市広州市交流プログラム、Japan in Today's World Program）の留学生に対して提供する日本語のコースであり、総合（J コース）、漢字（K コース）、会話（S コース）、読解（R コース）、作文（W コース）の５コースで構成されている。平均して80 ～ 100名余りの留学生センター所属の留学生を収容しているが、クラス定員に余裕があるため、それ以外に、九州大学の各部局に在籍する一般の留学生（修士、博士、交換留学生、研究生）の受け入れも行っている。現在、JLCs には400名前後の学生が登録をしており、述べ受講者数は500 ～ 600名である。これらの運営管理はオンラインシステムによって、受講申込からプレースメントテスト、成績管理などの一連の教務を補助しているが、まだ様々な問題が残っている。

１－１　コースの編成

今年度、JLCs で開講されている日本語授業（J、K、S、R、W）は以下、表１、表２のようになっている。括弧内は週当たりの授業コマ数であり、１コマ90分の構成である。以下、表１と表２は箱崎キャンパスでの開講コースの全体図である。伊都キャンパスで開講される日本語コースは総合コースの J1 ～ J4のみである。表１は2013年春学期（前期）の授業構成図である。春学期は R-6のプレース者がいなかったため、不開講とし、S-2の人数が少なく、S-3とのレベル差が小さかったため、S-2を S-3に入れ込んで、S-3a と S-3b のように２クラスにした。表２は2013年秋学期（後期）の授業構成図である。過去数学期間、K-2と K-3の受講者数が慢性的に少なかったため、１つのクラスに統合することとし、K-2を K-3に合併した。他のクラスに関しては通常通り開講をした。

*九州大学留学生センター講師

表１　JLCs のコース編成（春学期）

	日本語コース				
	総合	漢字	会話	読解	作文
入門	J-1（3）				
初級１	J-2（3）	K-2（2）			
初級２	J-3（3）	K-3（2）	S-3（2）		
中級入門	J-4（3）	K-4（2）	S-4（2）		
中級１	J-5（2）	K-5（2）	S-5（2）		
中級２	J-6（2）	K-6（2）	S-6（2）		
上級入門	J-7（2）	K-7（2）	S-7（2）	R-7（2）	W-7（2）
上級		K-8（2）	S-8（2）		W-8（2）

表２　JLCs のコース編成（秋学期）

	日本語コース				
	総合	漢字	会話	読解	作文
入門	J-1（3）				
初級１	J-2（3）	K-3（2）	S-2（2）		
初級２	J-3（3）		S-3（2）		
中級入門	J-4（3）	K-4（2）	S-4（2）		
中級１	J-5（2）	K-5（2）	S-5（2）		
中級２	J-6（2）	K-6（2）	S-6（2）	R-6（2）	
上級入門	J-7（2）	K-7（2）	S-7（2）	R-7（2）	W-7（2）
上級		K-8（2）	S-8（2）		W-8（2）

１－２　使用教材

2009年度より、初級のＪコース（J1 ～ J3）で使用する教科書を『初級日本語げんきⅠ』『初級日本語げんきⅡ』へ移行する作業を行い、移行作業が終了した。中級から中級２までの中級のＪコース（J4 ～ J6）で使用する教科書は、2011年度秋学期より、J4を『中級へ行こう』、J5を『中級を学ぼう中級前期』、J6を『中級を学ぼう中級中期』へ移行し、こちらも移行作業はほぼ終了している。現在は各レベルで使用している、クイズ（小テスト）や補助プリントなどの細部の改善や調整を行っている段階であり、今後はレベル間の繋がりをより強固なものにするために、レベル間での調整に入って行く計画である。

表３　各クラスでの使用教材

総合	使用教材	読解	使用教材
J-1	『初級日本語げんきⅠ』	R-6	大学生と留学生のための論文ワークブック読解編
J-2	『初級日本語げんきⅠ、Ⅱ』	R-7	大学生と留学生のための論文ワークブック論文編
J-3	『初級日本語げんきⅡ』	作文	使用教材
J-4	『中級へ行こう』	W-7	大学生と留学生のための論文ワークブック作文編
J-5	『中級を学ぼう中級前期』	W-8	『小論文への12のステップ』
J-6	『中級を学ぼう中級中期』		
J-7	『日本語上級への５つの　とびら』		
会話	使用教材	漢字	使用教材
S-2	『聞く・考える・話す　留学生のための初級日本語会話』	K-2	『Basic Kanji Book vol.1』
S-3		K-3	
S-4	『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』	K-4	『Basic Kanji Book vol.1、vol.2』
S-5	『聞いて覚える話し方　日本語生中継』	K-5	『Basic Kanji Book vol.2』
S-6	『日本語上級話者への道』	K-6	『Basic Kanji Book vol.2』 『上級へのとびら きたえよう漢字－上級へつなげる基礎漢字800－』
S-7	自主作成教材を使用	K-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
S-8		K-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』

１－３　開講日程

2013年度（平成25年度）の開講日程は以下の通りである。各学期は２期に分けられており、コース開始時に間に合わなかった来日遅れの学生への対応ができる。また途中でのレベル変えやコース変えにも対応できる。

表４　JLCs の開講スケジュール

	学期	開講時期
春学期	第１期	2013年（平成25年）　4月15日～2013年（平成25年）　5月31日
	第２期	2013年（平成25年）　6月　1日～2013年（平成25年）　7月22日
秋学期	第３期	2013年（平成25年）10月18日～2013年（平成25年）12月　2日
	第４期	2013年（平成25年）12月　9日～2014年（平成26年）　2月　3日

１－４　プレースメント

2009年度秋学期より、JLCs コースはオンラインによるプレースメントテストの体制へ移行したが、システムエラーやその他の事情などでオンラインテストに失敗した学生のために、紙ベースによる

バックアップテストを箱崎キャンパスで行う体制を取っている。システムエラーによる失敗者の数は昨年の2012年10月10日に紙ベースのバックアップテストに現れた失敗者数は13名であり、その数は少なく、ほぼオンラインによるテストは成功していた。また、オンライン化により、伊都キャンパスではJ1希望者に対するひらがな試験を除いては無人でのプレースメントテストに成功している。ところが、2013年度秋学期に実施したオンラインプレースメントテストにおいては、Windows 8の対応ができていなかったため、登録段階での失敗者やオンラインテスト段階での失敗者が続出し、2013年10月9日に96名という大規模なバックアップテストを行わなければならなかった。この問題については後述する。

2． 受講者数、及び、受講者の内訳

2－1 受講者数

図1に至近12年間の秋学期の受講者数の推移を示した。図2は同様に至近12年間の春学期の受講者数の推移を示した。秋学期は2008年以降、450～550名程度の学生数が続いており、春学期は2009年以降の5年間350～450名程度の学生数が続いている。

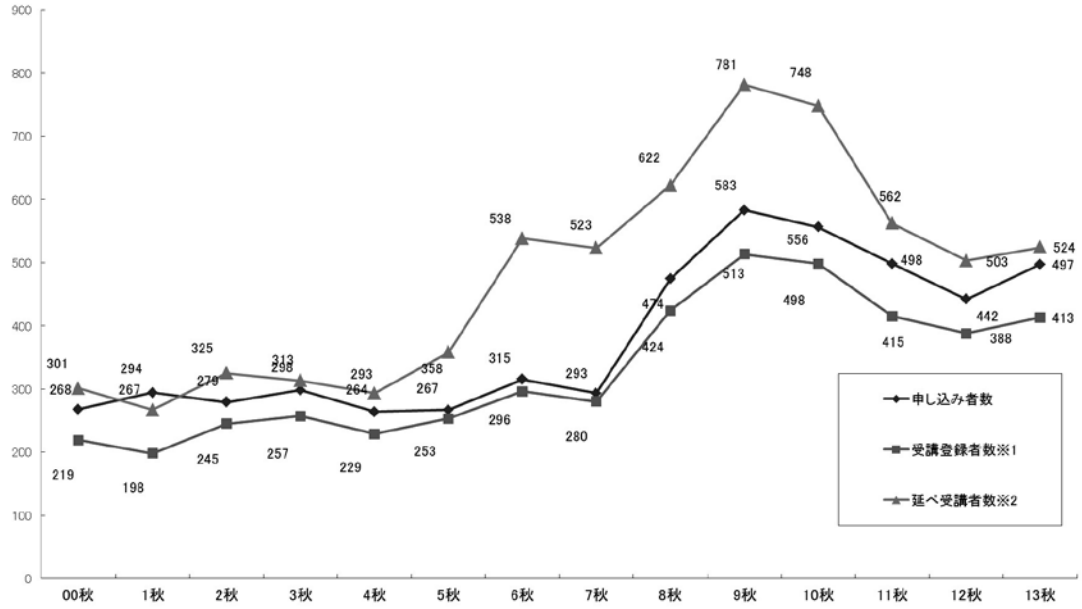


図1 秋学期の JLCs 受講者の推移

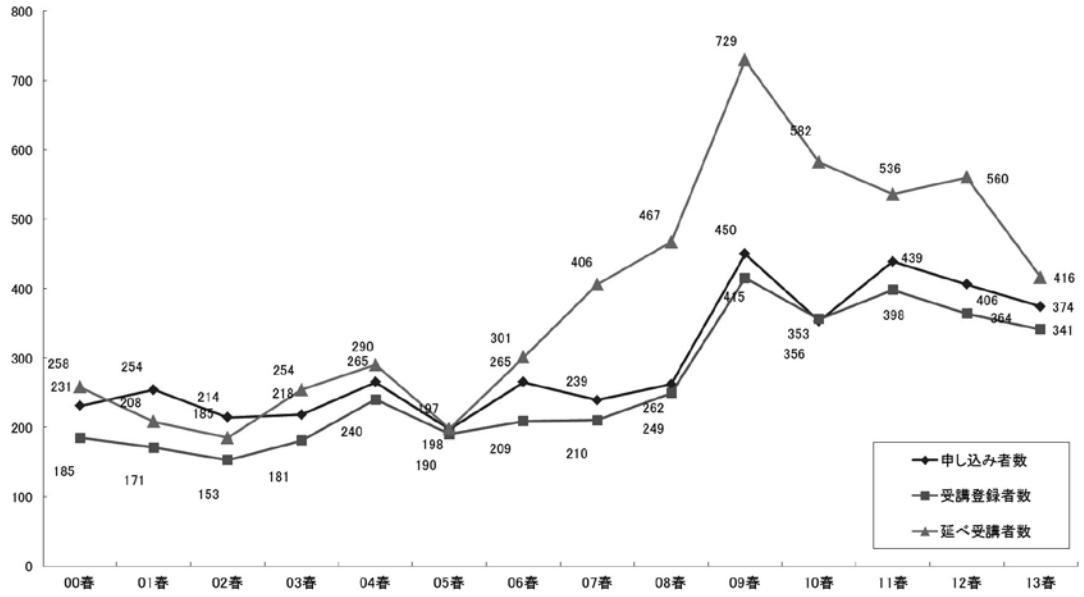


図２　春学期の JLCs 受講者の推移

2008年～2010年にかけて爆発的に受講者数が増えたことから、2011年春より、主にＪコースとＳコースにおいて入学年度１年以内の学生のみ受講可能という受講制限を設け、受講者数の制限を行ったが、2013年秋学期には年次制限をＳコース以外は外してみた。その結果、図１にあるように受講登録者数は増加せず、昨年度比で微増という結果であった。加えて、今後の受講者数の増加を予測し2011年秋学期より、留学生センター所属の学生以外については、選択できるコースう数を２コースから１コースのみに制限するという対策を行った。そのため、受講申し込み者数、受講登録者数に比べて、延べ受講者数は大幅に抑制されている。

２－２　受講者の内訳　－所属別―

受講者の内訳として、所属別に春学期と秋学期の別に表５にまとめた。

表５　所属別の受講者の内訳

所属	春学期		秋学期		所属	春学期		秋学期	
	人数	%	人数	%		人数	%	人数	%
留学生センター	81	24.3	88	17.7	歯学府・歯学部	1	1.0	5	1.0
人文科学府・文学部	20	5.7	13	2.6	薬学府・薬学部	4	1.2	3	0.6
比較社会文化学府	7	4.9	15	3.0	工学府・工学部	49	13.0	64	12.9
人間環境学府・教育学部	21	6.1	33	6.7	芸術工学府・芸術工学部	30	6.1	20	4.0

法学府・法学部	25	7.1	44	8.9	システム情報科学府	17	5.7	44	8.9
経済学府・経済学部	23	5.7	38	7.7	総合理工学府	4	0.5	0	0.0
理学府・理学部	4	1.2	6	1.2	生物資源環境科学府・農学部	39	7.1	68	13.7
数理学府	6	1.2	6	1.2	システム生命科学府	7	1.7	14	2.8
医学系学府・医学部	8	2.5	9	1.8	健康科学センター	2	0.0	0	0.0
統合新領域学府	9	1.0	9	1.8	その他	11	3.9	18	3.6

2－3　受講者の内訳　―身分別―

受講者の内訳として、所属を留学生センターと補講対象の部局学生の２グループに大別し、その身分ごとの数を、春学期と秋学期の別に表６にまとめた。留学生センター所属のサハリンプログラムは今年度より、予算が切れ、終了したプログラムであるが、報告のため、今年度までは表に記載しておく。

近年、特に伸びが著しいのが各部局が受け入れた研究生である。特に、秋学期は突出して研究生の数が多くなっている。秋に来日し、年末、或いは年明けに大学院等の試験を受け、合格すれば、九州大学か他校へ移っていくため、春学期は秋学期よりも減少するが、全体の流れとしては春学期も増加傾向にある。

表６　身分別の受講者の内訳

所属グループ	身　分	春学期	秋学期
留学生センター	Japan in Today's World Program	42	48
	日本語・日本文化研修コース	27	26
	研修コース	11	5
	日韓プログラム	–	8
	サハリンプログラム *	–	–
	福岡市・広州市交流プログラム	1	1
部局（補講生）	修士・専門職学位	64	98
	博士後期・博士・一貫制博士	83	92
	研究生	89	163
	交換留学生	48	47
その他	その他	5	8

2－4　受講者の内訳　―出身地域別―

表７は、受講者を出身地域で大別し、主だった国籍別で分けたものである。中国が圧倒的に多く、常に４割を占めている。しかし、留学生センターの各コース（JTW、JLCC、研修）においては必ずしも中国が多数ではなく、補講生として修士、博士、研究生のうちの中国の比率が非常に高く、以下のような結果になった。

表７　出身地域別の受講者の内訳

地域	国籍	春学期		秋学期	
		人数	%	人数	%
アジア	中国	143	39.6	214	43.1
	韓国	36	9.9	42	8.5
	インドネシア	14	3.9	30	6.0
	タイ	14	3.9	18	3.6
	ベトナム	11	3.0	16	3.2
	マレーシア	5	1.4	11	2.2
	ミャンマー	3	0.8	4	0.8
	台湾・香港	12	3.3	7	1.4
	その他のアジア	32	8.9	53	10.7
ヨーロッパ	フランス	14	3.9	17	3.4
	イギリス	7	2.0	6	1.2
	ドイツ	7	2.0	10	2.0
	その他のヨーロッパ	19	5.3	20	4.0
北米		17	4.7	15	3.0
アフリカ		13	3.6	18	3.6
南米		13	3.6	4	0.8
大洋州		1	0.3	4	0.8
合計		361	100	496	100

３．　受講者による授業評価

３－１　授業に対する評価

毎期、受講者には受講評価のアンケートを行っている。５段階評価（強くそう思う４、そう思う４、ふつう３、そう思わない２、まったくそう思わない１）の設問と、100点のスケールでの設問と、時間数での設問を用意している。今報告書では、秋学期の授業評価アンケートが取られていないため、春学期の授業評価のみを掲載して報告する。表８の授業の難易度に対する受講者の評価は「やや難しい」と「やや易しい」の間で若干の散らばりは見られるが、半数から６割の受講者は丁度よいと回答した。これはプレースメントをしていても日本語の授業において、完全なレベルの一致を実現するのは不可能なためである。表９の宿題の量に対する評価では、作文のクラスで「やや多い」という回答が見られたが、これは母集団が少ないため、個人的な受け取り方のレベルでこのような極端な数値になったと思われる。他の科目においては、やや多いという回答が１割から２割程度みられたが、授業の難易度、宿題の量のどちらも適量・適切との評価が得られている。

表８　授業の難易度に対する評価（%）

		易しい	やや易しい	丁度よい	やや難しい	難しい
総　合	初　級	1.2(2.3)	14.1(25.6)	65.9(62.8)	15.3(9.3)	3.5(0.0)
	中上級	2.9	20.0	57.1	14.3	0.0
漢　字		2.9	22.9	54.3	20.0	0.0
会　話		0.0	17.1	73.2	9.8	0.0
読　解		–	–	–	–	–
作　文		0.0	8.3	83.3	8.3	0.0

＊（　）内は伊都 JLCs、読解は無回答

表９　宿題の量に対する評価（%）

		少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総　合	初　級	0.0(0.0)	14.1(14.0)	65.9(74.4)	15.3(11.6)	3(0.0)
	中上級	0.0	5.7	74.3	20.0	0.0
漢　字		0.0	8.6	62.9	25.7	2.9
会　話		2.4	7.3	87.8	2.4	0.0
読　解		0.0	0.0	100	0.0	0.0
作　文		0.0	0.0	41.7	58.3	0.0

＊（　）内は伊都 JLCs

表10　授業の進度に対する評価（%）

		遅い	やや遅い	適当	やや速い	速い
総　合	初　級	2.4(2.3)	14.1(11.6)	70.6(69.8)	11.8(14.0)	1.2(2.3)
	中上級	2.9	17.1	68.6	11.4	0.0
漢　字		2.9	14.3	77.1	5.7	0.0
会　話		0.0	14.6	85.4	0.0	0.0
読　解		0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
作　文		0.0	16.7	83.3	0.0	0.0

＊（　）内は伊都 JLCs

3－2　受講者の自己評価

受講者自身の自己評価として、このコースの受講にあたっての予習と復習にあてた時間数を聞いた。全体を平均すると予習と復習とも、１時間から１時間半程度の時間があてられている。取り組みに対する意欲は４段階評価でほぼ３をつけた。

表11　学生の自己評価

	初級	中上級	漢字	会話	読解	作文
予習時間	1.84(1.44)	1.30	1.67	1.49	1.50	1.29
復習時間	1.59(1.57)	2.12	1.67	1.46	1.00	1.26
取組意欲	2.81(3.05)	2.91	3.00	3.27	3.00	2.92

＊予習時間、複数時間は時間数、取組意欲は４段階評価、（　）内は伊都 JLCs

3－3　教師に対する評価

教師に対して、「時間厳守」「授業準備」「わかりやすい」のテーマで０点から４点の５件法で評価をしてもらった。その結果は表12にある通りで、どの項目においても、受講者は JLCs コースの教師の授業に対する姿勢を高く評価していた。

表12　教師に対する評価

	初級	中上級	漢字	会話	読解	作文
時間厳守	3.38(3.49)	3.57	3.43	3.41	4.00	2.92
熱意	3.53(3.60)	3.71	3.63	3.78	4.00	3.67
授業準備	3.48(3.60)	3.71	3.60	3.68	4.00	3.58
分かり易さ	3.27(3.47)	3.51	3.46	3.59	4.00	2.92

＊最高点4.0、（　）内は伊都 JLCs

3－4　総合評価

受講者からの JLCs コースに対する総合評価を100点満点で出してもらったところ、全体平均で90.0％になり、非常に高い評価が得られている。

表13　総合評価

	初級	中上級	漢字	会話	読解	作文
箱崎 JLCs	88.7(90.3)	89.4	86.7	93.1	95.0	86.6

＊最高点100、（　）内は伊都 JLCs

4　今後の課題と対応

4－1　年次制限の効果について

2009年から2010年にかけて、延べ受講者数が700名を数え、受講者数も期ごとに100名ずつのレベルで増加し、この学習者数の急増を受けて、2010年から受講申請に対して、入学年次による受講制限を設けた（注１）。この措置によって、一旦は受講申請者数の増加が止まったが、2013年の秋学期に年次による受講制限をＳコース以外から外してみた。しかし、受講申込者数が微増に留まったことから考えると、年次制限は有効な措置では無かったのではないかという疑問が出てくる。なぜならば、入学後１年という制限には、１年以内の在籍しかできない研究生や交換留学生にとっては全く関係がなく、この制限には修士の２年次在学生と博士の２、３年次在学生しか該当しない。実際上の問題として、修士２年次在学生や博士３年次在学生が日本語の補講授業を取りに来られるような時間的余裕は余りなく、１年間の年次制限に該当する学生は殆どいないのである。

4－2　補講生に対するコース制限

2011年春学期までは留学生センター所属以外の補講学生が２つの日本語のコースを取ることができたが、延べ受講者数の多さは留学生センターの受容能力を大きく上回っていたことから、2011年秋学期より、留学生センター所属学生以外の補講生については、１コースのみの受講を許可することとした。その結果、延べ受講者数は、2011年秋学期より、500名強に抑えることができ、年次制限よりも、確実な効果が得られた。東日本大震災の影響で日本への留学生数自体が減少したということもあり、この３年間の秋学期の受講申込者数は400名強で推移し、現在の高止まりの状態が維持されている（図１、図２参照）。しかし、主に研究生の数が全学的に激増しており（表６参照）、今後も現状の体制を維持できるかは不明確である。１～２年のスパンでも大幅な受講者数の増加は過去2008年から2009年に経験しており、油断はできない。常に受容体制については案を出し続け、対策を練っておく必要がある。

4－3　所属身分による優先順位について

前節と関連して、コースに収容できなくなった学生を受講から外すためには、明確な基準がなければならない。JLCs の大前提として、コースに空きのある限りにおいて、補講生も受け入れるという枠組みである。そのため、留学生センター所属の学生を優先として受け入れ、補講生を配属するという作業は従来も続けられて来たが、補講生の中の優先順位が設定されていなかった。そのため、10月度の日本語教育部門の運営会議において、年次制限を外し、優先順位については、1）留学生センター所属学生、2）修士課程・博士課程・交換留学生、3）研究生、の順で階層を分けた。修士課程・博士課程の留学生と各部局間協定で受け入れた交換留学生は正規の九州大学の留学生であるが、各部局で受け入れた研究生は正規の九州大学の学生ではなく、この間に優先順位が付けられるのは当然であると考えられる。考慮しなければならないのは、 研究生の数が、2011年の春学期109名、秋学期139名、2012年の春学期91名、秋学期158名、2013年の春学期89名、秋学期163名と、春学期から秋学期にかけ

て倍増する現象が、毎年観察されるようになったことである。これらの各部局で受け入れている研究生は本来は正規の九大生ではなく、研究室付の学生であり、その後、九大に進学せずに他校へ行く可能性もある学生である。この研究生が秋学期には全体学生の３分の１を占めており、現在、留学生センターの本来業務以外の対象者にJLCsが展開されるという状況になっている。

４－４　オンラインシステムの問題

2013年秋学期のオンライン受講登録期間は様々な問題が発生した。Window ８に対応したシステムになっていないため、登録失敗者やテスト失敗者が続出し、昨年度には13名のみであった失敗者用の紙ベースのバックアップテストに96名が来るという事態になってしまった。現在のシステムはMac OSにも対応しておらず、これは重大な欠陥であると言わざるを得ない。そのため、早急にWindows ８とMacに対応するシステム構築をしなければならないのであるが、来年度の組織改編に向けて、コース体系や組織体系がどうなるのか不明瞭な部分も多く、それに連動したシステムに大幅な修正を加えにくいという問題もあり、今後、JLCsの主要な業務はこのオンラインシステムの移行作業になるものと思われる。

４－５　まとめ

九州大学留学生センターは来年度に組織改編があり、大幅な変更が発生するものと予測される。この組織改編の中で、JLCsコースにもコマ数やコース運営について様々な改革が要求されるものと思われる。目下、大枠のシステムとコースの運営を中心に新体制に対応できるよう準備を行っているところであるが、本来はオンラインシステムで運用するテスト項目の分析や、コース内の授業間の連携などに、より力を入れるべきである。このようなソフト面での充実のための作業に本格的に取り掛かるためには、全体の太枠の部分が決定しなければならず、移行期の運営の困難さを痛感している。

参考文献

大神智春（2010）「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」『九州大学留学生センター紀要』第19号，pp.57-70.
大神智春（2011）「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」『九州大学留学生センター紀要』第20号，pp.85-96.
小森和子（2010）「プレースメントテストのオンライン化の試みと問題項目の分析評価」『九州大学留学生センター紀要』第19号，pp.89-106.
斉藤信浩（2011）「オンラインプレースメントテスト問題項目の分析評価」『九州大学留学生センター紀要』第20号，pp.101-114.
斉藤信浩・菊池富美子・山田明子（2012）「漢字圏学習者の文法テストと読解テスト得点の非対称性の検証 ― 読解問題の検証を通して ―」『日本文化学報』第54号，韓国日本文化学会.
斉藤信浩（2012）「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」『九州大学留学生センター紀要』第21号，pp.39-51.

注

1）この制限は、主にＪコースとＳコースにおいて、入学年が１年以内の学生のみを申請対象者と設定し、受講申請を受け付けない制限である。入学年が１年以上を経過した学生については、Ｋコース、Ｒコース、Ｗコースの３つの技能コースには年次制限を設けていないため、これらの技能コースは受講することができる。

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，235－239
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 235-239

ソウル大学校生のための日本語上級集中プログラム

Kyushu University Intensive Japanese Courses for advanced level students from Seoul National University

斉　藤　信　浩*

西　原　暁　子**

１．概要

九州大学で行われているソウル大学校生のための日本語上級集中プログラム（Intensive Japanese Courses for advanced level students from Seoul National University）は通称ソウル大プログラムと呼ばれ、ソウル大学校の要請により2007年度後期の第５週目の１月より始まったプログラムであり、留学生センターの受託事業として同大の日本語上級レベルの学生に対して日本語の集中トレーニングを行うものである。ソウル大学の側では2011年までは言語学科が主監していたが、2012年度よりアジア言語文明学科に本事業が委譲された。九州大学側では、運営事務は国際交流推進室が担当し、日本語の授業は留学生センターの日本語教育部門が担当している。2012年度は2013年１月７日より２月１日までの４週間を受け入れ期間とし実施され、日本語上級者が４週間の日本短期滞在によって日本語力をより実用的なものに磨き上げようということを主目的とした日本語上級集中プログラムである。受け入れ学生数は10名（男３名、女７名）であり、ソウル大学内の各部局から全学的に選抜された学生である。これは今後、アジア言語文明学科所属の学生が中心のプログラムへと変化していく可能性がある。

２．2012年度の試み　― 簡易オンライン受験システムの導入と実施 ―

昨年度は九州大学留学生センターのオンラインシステムを12月の４日間のみ開放し、学生がソウルにいる段階でオンラインによるプレースメントテストを行った（斉藤・西原2012）。しかしながら、九州大学留学生センターのメインのオンラインシステムを利用するためには、オンライン受験期間の日付設定を管理者が操作して特別に日付を設けて、システムを開放するという作業をしなければならなかった。これはメインのシステムに障害を及ぼす可能性もあり、安定的なものではなく、またメイン

*九州大学留学生センター講師
**九州大学国際交流推進室准助教

のコースのスケジュールの合間にしかオンラインテスト期間を設定できないという制約もあった。

そのため、2012年度は別途にプレースメントテストのみを受験し、得点が得られる「簡易オンライン受験システム」の開発を行った。従来のメインのシステムでは、学生証に記載される学籍番号と氏名・生年月日・所属・身分・コースなどを入力しなければならず、これによって、個人の特定は明確にできるが、学籍番号の入力というハードルのために、短期コースである、ATW、AsTW、ソウル大プログラム、マヒドンプログラムなどでは、まず仮の学籍番号を付与して、氏名、生年月日、性別、所属（部局等の名称のこと）、身分（修士、博士、交換留学生、研究生など）、コース（留学生センター所属の学生の場合、JTW、JLCC、日韓プログラムなど、様々なコースがある）、メールアドレス、指導教官名と指導教官のメールアドレス、を入力し、システムに登録しなければならない。このように複雑に情報の入力を要求しているのは、留学生センターの受講管理システムが、他校や受講資格のない外国人が本学学生に混じって受講しに来たり、本学学生であっても受講制限のある学生が受講しに来たりする、「なりすまし受講」を排除するための“学生の特定”に主眼が置かれているからである。そのため、正規学生の登録には効力を発揮しているが、上述のような短期コースで、且つ、長期的な成績管理の必要のないコースの場合は、この留学生センターのオンラインシステムは使用のハードルが高く、運用が困難であった。

今回、使用した「簡易オンライン受験システム」は既存のメインシステムの中のオンライン受験の部分のみを取り出し、オンラインによるプレースメント機能のみに特化したシステムである。2012年６月に起案し、システム会社に委託したのち、３か月の開発期間をおいて納品され、10月11日に動作確認の試用試験を行った。

簡易オンライン受験システムの最初の本番実施がソウル大プログラムであった。2012年12月10日～14日までの１週間を受験期間と設定し、文法・読解・聴解の３種類のテストをオンラインによって、来日前に実施し、J レベルの判定を行った。システムは障害も発生せず、極めて円滑に学生11名の点数が得られ、プレースメントが行われた。

３．コース内容

３－１　2012年度のクラス開講にあたって

2010年度まではソウル大プログラム（および JLCC 生）のための１月開講のクラスとして、３つのクラスが開講され、３科目のうちから２科目を選択必修科目としていたが、2011年度からは２クラスを選択無しの必修科目として開講した。それに加えて、JLCs コースで既に開講されている日本語技能コースの K7、K8、W7、W8、R6、R7の６クラスに途中参加として接続する形で、これらの６科目も選択科目として用意した。本年度は昨年度の形態を引き継いでいる。

2010年度までの選択必修３科目は８～12名程度のプログラムには手厚すぎた。日本語技能コースで６クラス（実質的には K、W、R のレベル間の重複は許可していないため３クラス）が選択科目となっているため、必修２科目、選択科目３科目というのは10名前後の４週間のコースでは十分な選択肢の量だとも考えられる。ソウル大学としては、４単位のみを認定するので、殆どの学生は４科目しか受

講申請をしていないのが実情である。

3－2　各クラスの概要

各クラスの概要は以下の通りである。従来は漢字のKコースはK7とK8を対象にクラスを提供しているが、K6のレベルの漢字能力の学生がいたため、１名をK6に編入した。ソウル大プログラムに用意された必修２科目は全員が受講した。

必修科目

科目名		受講者数
上級日本語	四コマ漫画に見る日本	10名
	人と社会を考える	10名

選択日本語（日本語技能コース）

科目名		ソウル大生数	全受講者数
漢字	K7	3名	13名
	K8	0名	2名
読解	R6	5名	15名
	R7	2名	13名
作文	W7	5名	13名
	W8	1名	3名

3－3　成績評価

今回、大きく問題となったのは、2012年度より、ソウル大学として短期の海外研修の際の授業は協定校間であっても、単位認定がされないという方針に変更されたことである。昨年度までは単位認定がなされていたが、単位認定がなくなったことにより、授業担当教員から、昨年度の学生と比べて一部の学生の意欲の減退が明らかに感じられたという報告があった。しかし、第３週目ではやや学生の欠席が目立ったものの、それ以外では、授業上、大きな弊害はなく、出席・授業参加共に凡庸な成果を収め、11名全員が成績不認定にはならず、B～Aの成績評価を得ることができた。

4．社会科見学

社会科見学の一環として、2013年１月12日（土）に福岡県糸島市にある、公益財団法人九州盲導犬協会の福岡県盲導犬センターを訪問し、日本の盲導犬についての見学学習を行った。盲導犬とは視覚障害者が安全かつ、快適に生活できるように、その行動を誘導する犬のことであり、韓国では「案内犬（안내견：annaegyeon）」と呼ばれている。

日本には盲導犬センターは10カ所設置されており、九州地区では当センターのみである。日本の盲導犬数は視覚障害者約7800人に対して、実働犬1067頭（2011年３月）であり、盲導犬先進国のイギリ

スは人口が日本の半分であるにも関わらず5000頭の盲導犬がおり、日本がこの分野において大きく後れを取っていることが説明された。また、韓国の盲導犬センターも民間企業であるサムソンが後援する１カ所のみであり、韓国も非常にこの分野では後れを取っていることが説明された。

盲導犬には繁殖犬と訓練犬の２種類があり、繁殖犬から生まれた子犬は生後～１年間は里親に出され、人間に慣れながら成長する。その後、盲導犬センターに引き取られ、１年間の訓練が開始される。盲導犬になれる数は10頭中、２～３頭に留まり、性格や能力の面で成功的に盲導犬になるのは非常に難しいということが分かった。センター卒業後、盲導犬は視覚障害者へ引き取られ任務を遂行するが、凡そ10年間活躍した後には、引退し、ペットとして再度人間に引き取られるということが説明された。センターでは訓練士の説明と盲導犬の実演があり、盲導犬と触れ合う機会もあった。ソウル大生からは訓練士に対して、様々な質問が出、有意義な学習時間となった。この学習を通して、韓国と比較して日本の方が社会保障の面では進んではいるが、必ずしも完全なものではなく、まだまだ不十分な面もあり、改善の過程にあるということが学習された。また、韓国の盲導犬事情についても、大きく興味を喚起することができた。

５．課題について

５－１　引率者不在の体制について

九州大学がソウル大学プログラムの事業を受諾した背景には、引率業務の一切を九州大学側で担当せず、ソウル大学の側が引率者を用意するという条件があった。そのため、昨年度までは引率者が同伴していたが、今年度より、ソウル大学の当プログラムの管轄が替わり、予算も変わったため、引率者をつけるのが困難になったという。その結果、引率者不在の状態でのプログラム運営となったが、この引率者の空白を九州大学の側で埋め合わせをする体制を構築することはない。最良の対策は、アジア言語文明学科の教員が学内業務の一環として、引率に同伴してもらうことであるが、嘗て、大学院生による引率があったため、今後、大学院生の引率も含めて要求をしていく。

５－２　学生の士気の低下について

３－３でも言及したが、単位が認定されないプログラムになったため、学生の士気低下が著しかった。奨学金を支給しているプログラムであるにも関わらず、４週間のコースで３回欠席するというのは非常に問題である。また、４週間の短期留学であるにも関わらず、国から親族が遊びに来たり、友人が遊びに来たりするというのは絶句する。５－１で言及した引率者不在の現状もあり、九州大学のみがリスクを背負ってJASSOに奨学金を申請し、責任を負うことはないのではないかという疑問も生じている。同時に、単位化されないということは奨学金の採択に大きく不利になるため、奨学金申請をしても採択されない可能性もある。

５－３　ソウル大学の体制について

冒頭でも言及したように、当プログラムが、アジア言語文明学科に移管されて初めての受け入れで

あったが、学生の士気が低かったという点と、引率者が不在になったという点以外には大きな問題は発生しなかった。移管後、初めての派遣ということで、ソウル大の側でも体制が整っていないことが考えられ、今後、双方で円滑で確実な体制構築と、信頼関係を築いていくことが期待される。

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，241－250
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 241-250

日本語研修コース

大　神　智　春*

１．はじめに

日本語研修コースは、大学院に進学する予定の国費研究留学生を主な対象として来日後の半年間日本語予備教育を行うコースである。日本語研修コース（以下研修コース）では、初級からの日本語教育、日本事情教育、専門教育の場への適応を促進するための活動を行っている。目標は「会話を中心とした初級日本語を習得させること」、「研究の場において日本人と円滑にコミュニケーションができるようにすること」である。平成24年度（2012年度）からは新コーディネーターが当コースを担当した。以下に平成24年度の実施状況を報告する。

２．実施概要

平成24年度研修コースの実施時期、主な日程は下記のとおりである。

１）実施期間　前期　４月10日－９月７日（第54期）
　　後期　10月12日－３月７日（第55期）

２）主な日程

①前期

開講式	４月10日
授業開始	４月17日
見学旅行（熊本城・阿蘇山）	４月28日
健康管理についての講義（健康科学センター：上園慶子）	５月24日
見学旅行（太宰府）	６月６日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	６月25日
書道の授業（学外講師）	７月11日
日本人学生との交流会（留学生センター指導部門：高松里）	８月８日
発表会（文集『世界の輪』46号に収録）	８月30日
授業終了	８月31日
閉講式	９月７日

*九州大学留学生センター准教授

②後期

開講式	10月12日
授業開始	10月19日
健康管理についての講義（健康科学センター：上園慶子）	10月24日
見学旅行（太宰府）	11月11日
見学旅行（熊本城・阿蘇山）	11月23日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	２月13日
日本人学生との交流会（留学生センター指導部門：高松里）	２月14日
発表会（文集『世界の輪』47号に収録）	２月20日
授業終了	２月22日
閉講式	３月７日

３）受講者

受講者は、文科省の国費外国人留学生のうち九州大学および北部九州地区の大学へ配属された研究留学生、福岡教育大学で研修予定の教員研修留学生（後期のみ）、学内募集に応募した九州大学の研究生である。

①前期　９名

８名が国費外国人留学生、１名が学内募集に応募した九州大学の研究生である。また、初級７名、中級２名である。中級者は「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」の３種類のクラスを受講した。

出身：カンボジア、コンゴ、シリア、チリ、ブラジル、ベトナム、マレーシア、メキシコ、ルワンダ

進学先：九州大学９名

②後期　８名

４名が国費外国人留学生、４名が学内募集に応募した九州大学の研究生である。

出身：イラン、エジプト、タイ、中国、フィリピン、マレーシア、ミャンマー、ラオス

進学先：九州大学６名、福岡教育大学２名

４）時間割

①前期

〈４月17日～７月18日〉第１ラウンド・第２ラウンド（JLC と同じ日程）

限	時間	火	水	木	金
2	10:30-12:00	J1		J1	J1
3	13:00-14:30	文化	文化	文化	文化
4	14:50-16:00	S1	K1	S1	K1

授業はJLCに合わせ、火曜日から金曜日まで開講した。J1を週３回開講するのもJLCとスケジュールを融合しているためである。「S1」「K1」「文化」は研修コース独自のクラスである。

〈７月19日～８月７日〉夏季ラウンド

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00	J2	J2	J2	J2	J2
3	13:00-14:30	J2	発表準備	J2	発表準備	J2
4	14:50-16:00	J2	発表準備	J2	発表準備	J2

JLCの第２ラウンド終了後に夏季ラウンドが開始し、J2終了程度の内容まで学習した。同時に、８月30日の最終発表に向けての準備を同時進行で行なった。

②後期

〈10月19日～２月１日〉第３ラウンド・第４ラウンド（JLCと同じ日程）

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00	J1	J1		J1	J1
3	13:00-14:30	J1	文化	文化	文化	文化
4	14:50-16:00		S1	K1	S1	K1

JLCと研修コースで開講授業コマ数を調整する必要が生じたため、後期はスケジュールを以下のように変更した。

- 冬季ラウンド全体の開講授業コマ数を減少させる。具体的にはJ2の開講授業数を減らし、冬季最終発表の準備を冬季ラウンドの主な活動内容とする。
- 冬季ラウンドでJ2クラスの授業数を減らす代わりに第３ラウンド・第４ラウンドにおけるJ1・J2クラス数を増加させ、研修生が無理なく日本語力を伸ばしていけるようにする。

〈２月４日～２月12日〉冬季ラウンド

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00	J2	J2	J2	J2	J2
3	13:00-14:30	発表準備	発表準備	発表準備	発表準備	発表準備
4	14:50-16:00	発表準備	発表準備	発表準備	発表準備	発表準備

上記のとおり、冬季ラウンドのスケジュールを変更する必要があったため、J2の開講授業数を減らし、発表準備を主な活動内容とした。

3．授業内容

1）授業時間数

前期：全17週間　合計346時間

後期：全17週間　合計295時間

2）使用教材

J1	：『初級日本語げんきⅠ』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき　ワークブックⅠ』	坂野永理他	The Japan Times
J2	：『初級日本語げんきⅠ』『初級日本語げんきⅡ』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき　ワークブックⅠ』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき　ワークブックⅡ』	坂野永理他	The Japan Times
K1	：『初級日本語げんきⅠ　読み書き編』	坂野永理他	The Japan Times
	プリント教材		
S1	：『初級日本語げんきⅠ』	坂野永理他	The Japan Times
	プリント教材		
文化	：自習作成教材		

3）授業内容

初心者レベルのクラスの授業内容は下記のとおりである。

J1　：日本語学習経験のない学習者を対象に、基礎的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す[1]。教科書の第１課から第８課がJ1に該当する。

J2　：J1で動詞、形容詞の過去形、非過去の活用を学習した後にJ2に入る。日常会話に必要な基本的文法や語彙を学び、身近な話題で会話ができる日本語能力を養成する[2]。教科書の第９課から第15課が学習範囲である。

S1　：J1のクラスと連動させながら、テキストの会話部分を補足発展させ、十分に会話の練習を行う。また、日常会話に必要な基礎的な表現を学ぶ。

K1　：ひらがな・カタカナの定着をはかった後に漢字学習を開始する。文法学習（J1クラス）の進度の後を追う形ですすめる。

文化：①日本の大学や日本社会での生活に適応できる力をつけること、②日本文化と研修生それぞれの国の文化の違いに気づき、異なる価値観を理解すること、③アカデミックな発表の方法を学ぶこと、の３点を目標としている。このクラスでは教室活動の他にフィールドトリップなどの見学や訪問も取り入れている。当コース終了前の最終発表会の準備も含む。

4．成績の認定と報告

J1、J2、S1、K1、文化からそれぞれ提出された成績を総合してコースとしての成績を判定する。既習者については、JLC の各受講クラスの成績を総合して研修コースとしての成績を算出する。2012年度は下記の通り前期・後期ともに全員合格であり、センター委員会の承認を得て終了が認定された。

総合評価	A	B	C	D	不合格
数値（%）	90 ～ 100	80 ～ 89	70 ～ 79	60 ～ 69	60未満
前期（人）	3	5	1	0	0
後期（人）	5	3	0	0	0

5．研修生からの評価

コース終了前に研修生による評価をアンケート形式で実施した。結果は今後の本コース改善の資料として活用している。以下に評価の結果をまとめる。尚、アンケートでは自由記述形式で研修生にコメントを書いてもらっている項目がある。大多数のコメントがコースや教師への感謝や肯定的なものであるが、中には今後のコース運営を考えさせられものもある。本稿では代表的なコメントおよび今後の課題として考えさせる意見を抜粋し紹介する。

1）研修生による評価

①前期　８月31日実施　　回答者：９名（初心者７名・既習者２名）[3]

質問１：日本語のクラスに関して

〈第１ラウンド・第２ラウンド〉（数字は人数）

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	6	0	1	0	0	0
S1	5	2	0	0	0	0
K1	4	1	1	0	0	1
文化	5	1	0	0	0	1

- 学生数が奇数だったのでよくなかった。先生はよかった。
- ペースが早く、作業量は多かったが価値があった。

〈夏季ラウンド（J2クラス）〉

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
3	4	0	0	0	0

- 進むペースが学生には早すぎた。
- ペースはよかったが、プレゼン準備の時間をもつことが難しかった。
- 短い期間で学ぶ内容が多く、宿題も多かった。第２ラウンドまでの授業ほど多くを学べなかった。

〈クラス間のバランス〉

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
6	1	0	0	0	0

- 自分自身で日本人とコミュニケーションができるようになった。このコースはとても役に立った。
- コースの構成がよかった。
- 内容は学生のレベルとつり合いが取れていた。研修コースは大変よかったので、次のレベルも続けて受講したい。

質問２：もっと勉強したいこと（複数回答可）

文法	会話	漢字	リスニング	発音	単語	読解	筆記	文化
5	5	4	4	3	2	3	2	2

質問３：毎日何時間ぐらい自宅学習に取り組んだか

4時間以上	1	平均約1.6時間
3時間以上	1	
2時間以上	4	
1時間以上	1	

質問４：研修生が日本語の学習に意欲的に取り組んだかどうか[4]

大変意欲的	意欲的	まあまあ	不足	全然足りない	無回答
2	4	3	0	0	0

質問５：コースへの満足度

100%	5	平均94%
90%以上	3	
80%以上	0	
70%以上	1	

質問６：授業以外の活動について

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
1）熊本・阿蘇旅行	7	1	0	0	0	0
2）大宰府見学	7	0	0	0	0	1
3）書道	5	2	0	0	0	0
4）小学校訪問	5	2	0	0	0	0

質問７：「最終発表会」について

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
8	1	0	0	0	0

- 研究室に入る前に専門の語彙を学ぶことが出来た。
- わからないところがあり問題がのこった学生もいたが、発表準備を早く終える学生もいたので、作業が早く終わった学生から帰れるようにしてほしい。
- 入試の為、私にはコースの中で一番重要な部分だった。このプログラムは大変役に立った。
- 私の研究において、科学的な概念を理解するのに役立った。
- 初めて日本語で発表したので最初は心配していたが、とてもよい経験だった。うまくできて嬉しかった。
- 科学的な（専門の）課題を日本語で書き、プレゼンテーションをする練習をすることができた。

質問８：コースへの提案

- 文法が難しかったので、もっと文法を中心にしてほしい。
- 文法の内容が、今後の授業で必要な知識を考えると易しすぎたようだ。
- 漢字クラスが多ければよい、サマーコースのレビューの時間を増やす。
- 必須の数学用語など、もっと科学的（専門的な）内容を学ぶ機会があったらよかった。

②後期　２月22日実施　　回答者：８名（初心者８名）

質問１：日本語のクラスに関して

〈第１ラウンド・第２ラウンド〉

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
げんき	8	0	0	0	0	0
S1	7	1	0	0	0	0
K1	5	3	0	0	0	0
文化	6	2	0	0	0	0

- 内容も良く宿題の量もちょうどよかった。テストもよかった。進むペースは遅めだった。
- もっと作文の宿題があればよかった。

〈冬季ラウンド（J2クラス）〉

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
6	1	1	0	0	0

- 発表準備にかけた時間が長かった。
- 発表準備に長く時間をかけるより、その分もっと文法を勉強したい。

〈クラス間のバランス〉

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
6	2	0	0	0	0

- すべてが完璧に準備されていてとてもよい。
- 文法と単語の知識がまず必要なのでＪクラスの勉強が多いほうが良い。しかしスピーキングの授業も同じく多い方が良い。

質問２：もっと勉強したいこと（複数回答可）

文法	会話	漢字	ﾘｽﾆﾝｸﾞ	発音	単語	読解	筆記	文化	ｽﾋﾟｰﾁ
4	7	6	5	2	2	3	3	2	4

質問３：毎日何時間ぐらい自宅学習に取り組んだか

4時間以上	2	平均約2.6時間
3時間以上	2	
2時間以上	3	
1時間以上	1	

質問４：研修生が日本語の学習に意欲的に取り組んだかどうか

大変意欲的	意欲的	まあまあ	不足	全然足りない	無回答
2	2	3	0	1	0

質問５：コースへの満足度

100%	3	平均94%
90%以上	3	
80%以上	2	
70%以上	0	

質問６：授業以外の活動について

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
1）熊本・阿蘇旅行	5	2	0	0	0	1
2）大宰府見学	7	1	0	0	0	0
3）小学校訪問	8	0	0	0	0	0

質問７：「最終発表会」について

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
5	2	1	0	0	0

- 新しい言葉が勉強できた。自分たちの進歩がみられた。
- 日本語での発表の機会は今後もあるのでよい経験だった。
- 発表の準備の時、たくさん日本語を勉強したのが役立った。
- （専門の）言葉が難しすぎて、教師の手助けなしには発表の準備ができなかったので、とても有意義だったというわけではない。（どちらとも言えないを選んだ学生の回答）

質問８：コースへの提案

- 発表プログラムは時間がかかるし内容が難しすぎると思った。
- 社会との交流プログラムや日本人学生との活動をもっと増やしてほしい。
- もっとリスニングの力がつくと良かった。
- 週に一度でも日本人学生と交流する機会があればもっと実用的な日本語を練習することができるだろう。

２）評価のまとめ

前期・後期ともに、文法クラスに関するコメント、夏季・冬季ラウンドの学習内容に関するコメント、最終発表会に関するコメントが多かった。

文法クラスに関しては、もっと多くの内容を学習したいというコメントが多かった。夏季・冬季ラウンドの学習内容も文法学習に関するものが多く、この期間も文法学習をもっと進めたいという意見が目立った。

最終発表会に関しては、第１に、発表準備にかける時間の長さについての意見が多かった。現在は夏季・冬季ラウンドの大部分の授業時間を発表準備に割いているが、これは長すぎると感じている研修生がいることが明らかになった。第２に、発表準備は個人作業であるので、作業時間も個人のペースに合わせて決めさせてほしいという声があった。発表準備は各学生が自分のペースで行っていく。作業のスピードは個人差が大きく、早く終わる研修生もいれば授業中に終えることができない研修生もいる。現在は、全員に授業終了時間まで教室にいて次の作業を続けるよう指示しているが、授業時間が終了していなくても作業が早く終わった研修生から帰れるようにするなどの対応

を求めるものであった。

第３に、発表のテーマに関するコメントが多かった。研修コースでは、コース終了時に自分の専門について日本語で発表するプログラムを行っている。大多数のコメントは、自分の専門について日本語で発表することは大変有意義で今後の日本での研究に役に立つ、というものであった。しかし一方で、コース終了時点の日本語レベルで専門について発表するのは難易度が高すぎると感じている研修生や、教師の手厚い手助けがなければ準備をすすめることができないことにジレンマを感じる研修生もいることが分かった。

６．今後の課題

今後の課題として、以下の２点をあげることができる。

①学習内容と授業時間の配分

多くの研修生が文法学習を少しでも先に進めることを希望していることが明らかになった。現在は夏季・冬季ラウンドは最終発表の準備が主たる活動内容になっているが、この期間も文法学習続行を望む意見が見られた。また、発表準備にかける時間が長すぎると感じている研修生もいたことから、文法学習と発表準備にかける時間のバランスを見直し、授業時間の配分を再度検討する必要がある。

②最終発表について

大多数の研修生が最終発表について高く評価しており、発表のテーマについても今後の研究に役に立つと考えている。しかし、コース終了時の日本語力ではかなり難易度の高いテーマであり現在は教師の大きな手助けが必要とされているのが現状である。研修コースの大目的が日本語の習得である以上、できる限り研修生個人の力で発表の準備を行えることが理想であり、今後、どのようにすれば研修生が自力で発表に向けて取り組んでいくことができるか検討していく必要がある。

注

1. JLC ホームページ　http://jlc.jimu.kyushu-u.ac.jp/jlc/placement/PCampusSelect.aspx　を参照
2. JLC ホームページ　http://jlc.jimu.kyushu-u.ac.jp/jlc/placement/PCampusSelect.aspx　を参照
3. 質問１～質問３までは初心者７名の回答。
4. 質問４～質問８までは当コース受講者９名（初心者７名、既習者２名）の回答。なお、質問６については、既習者１名が参加できなかったため合計８名の結果となっている。

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，251－252
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 251-252

広州市研究生プログラム

大　神　智　春*

１．はじめに

広州市研究生プログラムは、福岡市と中国広州市との友好都市交流の一環として1984年度（昭和59年）に開始された。毎年１名の日本語研究生が広州市から派遣され九州大学の留学生センターで日本語を学習するとともに、福岡市の市役所で実務レベルの研修を行っている。

２．概要

２－１　プログラム実施期間

2007年度（平成19年度）までは研修期間は半年間であったが、2008年度より１年間となった。2012年度の研修期間は2012年４月1日から2013年３月31日までである。

２－２　プログラムの内容

派遣される研究生の日本語レベルはゼロ初級から上級レベルまで年によって異なる。そのため、毎年派遣されてきた研究生の日本語レベルを診断し、研究生にあった１年間のカリキュラムを組み立てている。以下は2012年度（平成24年度）の研究生についての報告である。

３．2012年度（平成24年度）の広州市研究生プログラム

３－１　2012年度（平成24年度）春学期

自己申告では数年前に旧日本語能力試験１級に合格しているとのことであり、当センターのプレースメントテストの結果でも、上級レベルであると診断された。

１）受講したコース

①J7（上級入門総合日本語コース）
②K7（上級入門漢字コース）
③S7（上級入門会話コース）
④R7（上級読解コース）

上にあげた４種類のコースのほかに、日本語研修コースが実施している小学校訪問と熊本・阿蘇日

*九州大学留学生センター准教授

帰り旅行にも参加し日本文化や日本社会に対する理解を深めた。

2）使用教材

① J7 ：『日本語５つのとびら TOBIRA －中上級編』
② K7：『Intermediate Kanji Book vol.1』
③ S7 ：自作教材
④ R7：『上級日本語教科書 文化へのまなざし【テキスト】』

3－2　2012年度（平成24年度）秋学期

Ｊコース（総合日本語コース）が春学期に受講した７レベルまでしかないため、秋学期は以下の３種類のコースを受講し、より自然な日本語の習得を目指した。

1）受講したコース

① K8 （上級漢字コース）
② S8 （上級会話コース）
③ W7（上級作文コース）

2）使用教材

① K8 ：『Intermediate Kanji Book vol.2』
② S8 ：新聞など適宜
③ W7：『小論文への12のステップ』

3－3　文献講読

今期の研究生は上級レベルであり文献講読をする日本語力があると判断したため、１年間かけて文献講読を行った。毎月新しい論文や文献を読み、内容を要約するとともに自分の考えなどをまとめさせた。コーディネーターとは毎月１度面談し、その際に内容を確認しレポートを提出させた。また、春学期末と秋学期末に、学期を通して講読した内容についてのまとめレポートを提出させた。2012年度の研究生のテーマは「福岡市と広州市の交流史」である。

文献講読は、研究生の興味に沿った内容を選択したため、日本語の授業とは異なった日本語を学ぶことができるという点で大変効果があった。

なお、文献講読の面談の際に、日本での生活や大学の授業で問題等がないか定期的に確認した。この定期的な面談は研究生の生活状況や日本語学習状況をきめ細かく把握し状況に応じて適切な対応をする上で効果があった。

4．今後の課題

今年度の研究生は上級レベルの研究生であったため、文献講読をスムーズに行うことができたが、本プログラムで九州大学に来る学生が必ずしも毎年上級レベルであるわけではない。

文献講読を行うことが困難であるレベルの研究生には別途課題を準備し、研究生が明確な目的意識を持って学んでいけるよう指導したい。

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，253－264
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 253-264

短期研修における日本語の授業の実践報告

マヒドン大学の学生の受け入れから

浅　賀　智　絵*

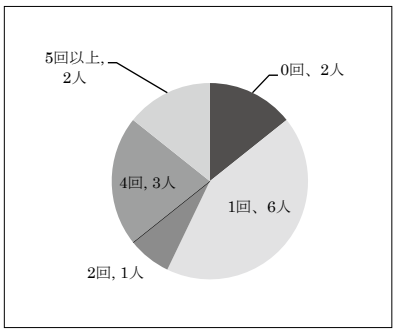
武　田　英里子*

１．はじめに

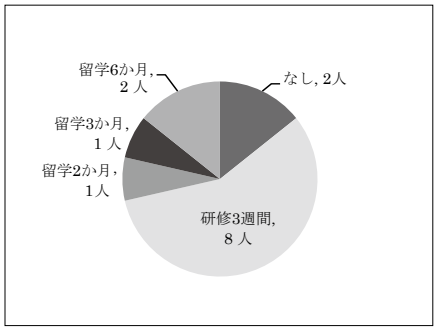
九州大学ではタイのマヒドン大学との大学間協定により、2007年から教育連携プログラムを行っている。そのプログラムの一環として、2008年よりマヒドン大学から学生を受け入れ、九州大学にて約２週間の短期日本現地研修（以下「短期研修」）を実施している。この研修は①日本語の授業、②日本入門講義（英語による日本の歴史、社会、経済などに関するセミナー）、③日本文化体験（着物着付け、お茶会など）、④見学旅行（大宰府、阿蘇などへの見学）の４項目で構成されている[1]。その中で、日本語の授業は約15時間を占める。2013年の短期研修は４月に行われ、14名の学生を受け入れた。本稿では、その短期研修における日本語の授業の実践について報告する。

２．2013年の短期研修の参加者

2013年の短期研修に参加した学生はマヒドン大学の International College で日本語を学んでいる学部生14名（男子５名、女子９名）である。図【1】、【2】を見るとわかるように、今回の参加者は過去の訪日回数が多く、３週間以上の研修や留学経験者も多かった。



図【1】学生の訪日回数



図【2】学生の訪日研修歴及び留学経験[2]

---

*九州大学留学生センター非常勤講師

1　詳しいスケジュールは添付資料１を参照。

2　研修３週間の参加歴のある学生８名のうち４名は３週間の研修参加経験が２度ある。また、３か月の留学歴がある学生は、３週間、２週間の研修にも参加した経験があるが、一番長い訪日研修歴を集計対象にした。留学６か月の学生２名は、当時日本の他大学に留学中であった。

表【1】　事前アンケートの結果

日本語の授業で何を一番練習したいですか。

内容	人数 [3]
新しい文法・表現	1
会話の練習	11
書く練習	0
読む練習	0
聞く練習	0

表【2】　日本語の授業のシラバス

日付	回	内容・トピック
4月1日（月）	1	オリエンテーション 自己紹介 日本語の授業の目標設定
4月2日（火）	2	レストランで使う表現 プロジェクト準備〈中級クラスのみ〉
	3	着物について 大宰府訪問の準備・日本の神社について
4月4日（木）	4	困った時の表現（道案内）
	5	誘う時の表現 断る時の表現〈初級クラスのみ〉 熊本・阿蘇旅行について
4月8日（月）	6	熊本・阿蘇旅行の報告・感想
	7	チューターとの交流活動：ゲーム
4月9日（火）	8	おみやげについて
	9	買い物の時の表現
4月10日（水）	10	チューターとの交流活動：大学生活について
4月11日（木）	11	茶道体験について 最終発表の準備
4月12日（金）	12	日本語の授業の目標に対する評価 最終発表の準備

3．日本語の授業の概要

今回の研修の日本語授業では、機能・場面シラバスを採用し、会話練習を中心に授業を行った。吉川・菊池・山田（2011）によると、2010年の同研修は「体験」から学ぶことを重視してプログラムが組まれており、日本語の授業は体験のサポートとしての役割を担っていた。今回の研修では学生の多くが過去に訪日研修に参加した経歴があり、日本語のレベルも初級後半から中級と例年より高かったことから、筆者らは体験のサポートよりも日本にいるという機会を活かして教室外でも実際に日本語が使えるように、会話練習を中心とした実践的な授業のほうがよいと考えた。また、学生の要望も取り入れたいと考え、初日のオリエンテーションの際に事前アンケートを行った。日本語の授業で何を一番練習したいか聞いたところ、14名中11名が会話の練習と回答した（表【1】参照）。この結果から、筆者らの想定した授業内容が学生の希望と合致していたことがわかり、予定どおり、学生が日本で遭遇する場面における会話練習を中心とした授業を行うことにした。授業のシラバスは表【2】のとおりである。

授業は１コマ75分で、クラスは学生のレベルによって初級と中級の２クラスに分けて行った。授業のトピックは２クラスで統一し、クラス毎に表現や活動内容の内容を調整した。ただし、チューター[4]との交流活動の１回目は、２クラス合同で行った。

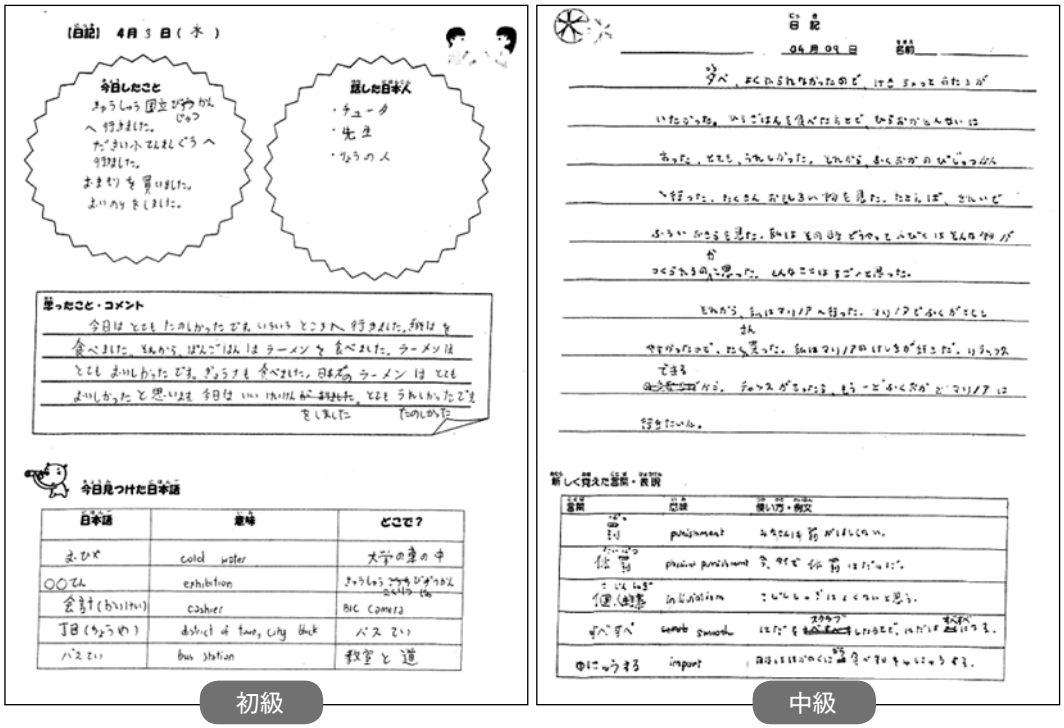
主な日本語の授業の流れは、①日記に基づく小スピーチ及び質疑応答、②トピックに沿った表現練習、③会話練習及びロールプレイである。また、日本文化体験活動や研修旅行の前には、それぞれ

3　総数14名だが、２項目選択した学生２名は集計から除外した。

4　ここでのチューターとは、来日した学生の世話役として、文化体験に一緒に参加したり、プログラム時間外に町を案内したりする九州大学の学生のこと。

の活動の導入となる授業を行った。

学生は研修の最後日に「The Japan I discovered」というテーマのもと、日本語でスピーチを行うという課題があらかじめ定められていた。そのため、授業では最終発表に向けての準備も兼ねて、毎日日記を書くこと、それらを元に授業で小スピーチを行うことを課題とした。これには次の３つの狙いがあった。一つ目は授業外で書く練習をさせること、二つ目は最終発表に向けて各自の発見や感想を記録させること、三つ目は毎回の小スピーチを通して、日本語で発表することに慣れさせることである。初級クラスでは、その日にしたこと、日本語を話した相手、自分が思ったことやコメント等をメモや短文で書いてくるように指示した。これに対して中級では、10行程度のまとまりのある作文を課した。どちらのクラスでもその日に新しく覚えた単語や表現及び意味をメモする欄を作り、初級ではその語彙を学んだ場所、中級ではその語彙を使った例文を書かせた。



図【3】学生の日記の例[5]

今回、新たな取り組みとして、チューターとの交流活動を２回、授業に組み込んだ。１回目は２クラス合同でのゲーム、２回目は会話練習である。２回目の授業では、「大学生活について」というテーマで、初級ではインタビュー、中級クラスではグループディスカッションを行った。

また、中級クラスではプロジェクトワークを課題にし、最終発表に含めて発表してもらった。学生

5　上日記には教師の添削記述を含む。

には各自でテーマを見つけ、日本で調べてみたいことについて、周りの人に質問するなどして、結果をまとめるように指示した。プロジェクトワークを取り入れたのは、プロジェクトワークを行うことで、チューターや研修関係者以外の日本人と話すきっかけを作り、日本への理解を深めることができると考えたからである。以下に学生のプロジェクトワークのテーマを紹介する。

表【3】中級学生のプロジェクトワークのテーマ

• 大学生とアルバイト	• 日本人の時間についての考え方
• 日本人のお茶	• アジア旅行で一番行きたい国
• 日本の生活	• 流行
• タイと日本のお菓子	• 日本で直接言えないこと

4．参加学生による日本語授業の評価

研修終了後にアンケート調査を実施した。以下にその結果の概要を示す。学生のアンケートの自由記述及び設定目標は抜粋の上、原文のまま引用する。

4－1　日本語授業全般

①日本語の授業は全体的にどうでしたか

	とてもよかった	よかった	あまりよくなかった	よくなかった
中級	3	5	0	0
初級	5	1	0	0

②授業は難しかったですか

	とても難しかった	難しかった	ちょうどいい	やさしかった	とてもやさしかった
中級	0	1	7	0	0
初級	0	1	5	0	0

③日本語の授業の中でどれがよかったですか（複数回答可）

	レストラン	困ったとき	着物・太宰府について	誘う・断る	熊本・阿蘇について	（ゲーム）チューターとのセッション	おみやげ	買い物	（大学の違いについて）チューターとのセッション	茶道について	その他
中級	7	6	3	2	1	2	5	6	5	4	1[6]
初級	4	3	2	3	0	4	1	4	3	2	0

④日本語の授業に参加して、日本語が上達したと思いますか

	はい	いいえ	どちらともいえない
中級	6	0	2
初級	5	0	1

理由（自由記述）

【中級】

- we learned more of daily life conversation which is good. But in terms of language skills, Im not really sure
- know correct way to speak and use conversation more naturally as Japanese
- this course focus on dairy life situation

【初級】

- ２週間は毎日日本語を話しますから、毎日れんしゅうことができます。タイで教室だけ日本語を話しました。
- I think I became a little in speaking Japanese to the people I am not close.

一部評価が分かれたトピックもあったが、日常会話の授業については、概ね良い評価が得られ、学生の満足度も高いものであった。授業で学生からの要望に柔軟に対応したり、事前アンケートをもとに、学生の要望を取り入れたトピック選びをしたりしたことが満足度の高さにつながったと考えられる。

自由記述にもあるように、中には日本語の上達を実感できない学生もいた。２週間という非常に短い研修であったため、このような学生がいるのは当然であろう。しかし、短い研修でありながら、筆者らの予想以上に多くの学生が自らの日本語の上達を感じており、このことから今回の授業が彼らの日本語習得に役立つものであったと言えるだろう。

6 「その他」を選んだ学生は“I'm interested in all kind of culture”と回答していた。

4－2　チューターとのセッション

⑤日本人チューターが入ったクラスはどうでしたか

	とてもよかった	よかった	あまりよくなかった	よくなかった
中級	7	1	0	0
初級	5	1	0	0

理由（自由記述）

【中級】

- Because we are same age so it's feel more confortable to talk to them
- japanese class with the tutors was fun. It's like we were chitchatting but talked more about Japanese and Thai university students. It was very interesting.
- we can exchange opinion and experience with tutors who are native Japanese, so we can learn about Japan though them directly

【初級】

- They are fun to be with and are very helpful
- They provide real experience and real conversation

⑥日本人チューターとの授業はもっと多いほうがいいですか

	はい	いいえ
中級	5	3
初級	3	3

- どんなことを話したいですか

【中級】

- how to make friends
- Maybe taking about teenagers lifestyle or how to make friend in Japan
- dairy life lifestyle
- watching movie

【初級】

- 日常の会話です
- hobby
- Game（Japanese game that is easy to play but we can play in team）
- maybe riddles game in Japanese.

総じて高評価が得られているものの、セッション回数を増やすかどうかについては中級と初級で異なる反応が見られた。どんなことを話したいかという質問に、中級の学生は上記のとおり、具体的なディスカッションのトピックを挙げてきた。これに対し、初級の学生はゲームや日常の会話をしたい

という程度の記述に留まった。中級の学生は、全体の授業の中でよかった項目を選ぶ際も、１回目のゲームのセッションより２回目の会話のセッションを選ぶ人が多く、自由記述でも２回目の授業を評価する記述が多く見られた（4－1の質問③参照）。ディスカッションに足る日本語能力を有する中級の学生はチューターとの言語交流に満足感があり、次に話したい話題まで考えることができていたようだ。このように、中級には会話中心の交流が適しているが、初級には「日本語を使っていっしょに何かをやる」といったゲームやアクティビティのほうが、負担が少なく適当のようである。

４－３　課題

⑦日記

	とてもよかった	よかった	あまりよくなかった	よくなかった
中級	0	6	2	0
初級	1	5	0	0

理由（自由記述）

【中級】

- keep checking and improving grammar skill
- I think it's kind of hard work to write every day. It was like having an essay homework everyday
- 毎日日本語で日記をかきます。だから、日本語がじょうずになると思います。
- too much but good

【初級】

- Let us have chance to practice writing in Japanese and remember new words
- It helps me remind myself that what have I done today, also I helps my Japanese language skill as well. In addition I could learn more vocab as well.

日記に対して、その日に何をやったか覚えておくのに役に立った、新しい単語を覚え、書く練習になったなど肯定的なコメントがある一方で、エッセイの宿題を書いているようで大変だったといった否定的なコメントも中級の学生から見られた。図【3】を見ると分かるように、初級は数行程度の量だが、中級は量が多かったため、プログラムで毎日忙しい学生たちには、毎日日記を書くことは負担が大きかったようである。しかし、「多すぎたけどよかった」のように、自分の役に立つと認識していたことをうかがわせるコメントもあった。学生は日記について概ね肯定的な評価をしているが、一部の学生には負担が大きかったため、一回の日記の量や提出頻度などを調整する必要があるようだ。

⑧小スピーチ

	とてもよかった	よかった	あまりよくなかった	よくなかった
中級	1	7	0	0
初級	2	4	0	0

理由（自由記述）

【中級】

- practice to speak Japanese in public
- Good chance to speak with at long duration & practice
- It's good to hear about people story

【初級】

- We can share what we did in last day and we can practice speaking
- I like giving speech but when it comes to give a speech in Japanese it becomes very hard. I'm still not good in Japanese. Maybe that's why I'm nervous when I have to speak in Japanese.

⑨太宰府・熊本のクイズ

	とてもよかった	よかった	あまりよくなかった	よくなかった
中級	0	8	0	0
初級	1	5	0	0

理由（自由記述）

【中級】

- it makes us pay more attentions about the trip or even do far the research
- It was fun like finding puzzle

【初級】

- The field trip is very well-prepared and I have learned a lot not only inside class, but outside of the class as well.
- Make us to be more concern about history of Kumamoto castle. Not just only travelling and taking photo.
- But because I have no interest at dorm, it is very hard for me to do homework☺

⑩最終発表

	とてもよかった	よかった	あまりよくなかった	よくなかった
中級	1	6	1	0
初級	2	4	0	0

理由（自由記述）

【中級】

- We got to learn and recall what we have learned in this program
- get to share what I have experienced
- I wanna write about what I really met, not what I interviewed

【初級】

- I got chance to present in Japanese which is a very good experience for me

- I knew more about what my friends think about Japan, it is very interesting
- Everyone laughed about my story which me they were quite enjoy my presentation

⑪プロジェクトワーク

	とてもよかった	よかった	あまりよくなかった	よくなかった
中級	2	4	2	0

理由

- good tool to evaluate knowledge and usable in reality
- get to talk to other Japanese other than tutor
- it was very interesting to really try find out what Japanese people think
- the period is bit short, so we don't have enough time to do project if we have more time, we maybe able to do better.

小スピーチ・最終発表については、初級・中級共に高い評価を得た。学生は各自の経験を交えながら、それぞれが発見し新たに感じた日本について発表していた。自由回答の理由から、話す練習としてだけでなく、他の学生と経験や感想を共有できたことが評価の高さにつながったことが、見てとれる。また、初級の学生の中には最終発表に対する不安を口にする者もいたが、最終発表後に毎日の小スピーチが最終発表へのいい練習になったと言う学生もいた。小スピーチを何度も行ったことで日本語のスピーチに慣れたようだ。

プロジェクトワークについては、半数以上が「よかった」と高評価で、自由記述には新たに日本人と話すきっかけとなったことや日本人について知るのがおもしろかったなどのコメントが見られた。一方、「あまりよくなかった」と回答した学生が２名いた。その理由として、２名とも準備の時間が短かったことを不満として挙げていた。また、このうち１名は最終発表も「あまりよくなかった」と回答しており、その理由を「インタビューしたことではなく、体験したことについて話したかった」としている。これはプロジェクトワークの意義がうまく伝わらなかった例であり、準備の時間配分も含め、プロジェクトワークを学生に課す場合、十分に配慮しなければならない点であると思う。

４－４　目標設定

日本語の授業の初回に目標シートを配布し、記入させた（表【4】参照）。これは研修参加前の日本・日本人に対する印象や自己意識を記録し、明確にすることで、研修参加後の印象と比較できるようにし、最終発表へつなげてもらうためである。

表【4】目標シート及び目標達成シートの質問事項

<table>
<tr><th>目標シート</th><th>目標達成シート</th></tr>
<tr><td>1．プログラムの中でどれに一番興味がありますか。
2．この２週間でどんなことにチャレンジしたいですか。
3．この２週間の目標を立てましょう。（２つ）
4．日本に来る前に日本についてどう思っていましたか。</td><td>1．プログラムの中で一番印象に残っていることは何ですか。どうしてですか。
2．この２週間でどんなことを学びましたか。どんなことにチャレンジしましたか。
3．目標は達成できましたか。
<table><tr><th></th><th></th><th>どうしてそう思いますか。</th></tr><tr><td>①</td><td>1…2…3…4…5</td><td></td></tr><tr><td>②</td><td>1…2…3…4…5</td><td></td></tr></table>4．プログラムが終わって、日本や日本人に対するイメージや考え方が変わりましたか。</td></tr>
</table>

学生が立てた２週間の目標の主だったものを紹介する。

- 一人で日本で買い物できるようになる
- まいあさ、ごはんをたべながら、ニュースをきく
- 毎朝クラスに間に合う
- 「です」「ます」じゃない日本語をうまく話したいです
- 有名なところの道の名前をおぼえたいです

授業の最終日には目標達成シートを書いてもらい、初回の目標シートと比べさせた。そして目標達成度を５段階で自己評価させた。結果は以下の通りである。

- 目標は達成できましたか（有効回答数28：学生14名２つずつ）

	よくできた	できた	すこしできた	あまり できなかった	できなかった
中級	3	7	5	0	1
初級	1	6	2	2	1

評価に対するコメントでは、店員や友だちとたくさん話した、一人で買い物をしたなど達成感を書いている学生もいれば、何とか達成することができたが流暢さに欠けるので、もっと勉強しなければならないと感じた、早くて聞き取れなかったからもっと練習しなければならないなど、帰国後の学習につながるようなコメントをしている学生も多く見られた。日本の印象については、思ったとおりだったと再認識する学生や、イメージしていなかった新たな発見をしている学生など様々だった。しかし、今回の研修が、彼らにとって各々独自の視点で日本を捉えるいい機会になったことは確かなようである。

5．今後の課題

以上、マヒドン大学の学生に対する短期研修において行った日本語の授業について、報告した。今後の課題としては、学生の日本語のレベルに応じたチューターとの交流活動の内容の検討が挙げられる。また、短期研修全体のプログラム内容を考慮し、学生の負担になりすぎない課題の検討も必要である。

今回の研修では、参加者が初級後半から中級レベルで、来日歴もあり、学生のレベルがまとまっていたことから、学生からの要望が受け入れやすかったが、今後は学生の日本語レベルのばらつきが大きいクラスになる可能性もある。そのようなクラスにも対応しつつ、日本で学習するという地の利を活かしたシラバスを目指していく必要があるだろう。

参考文献

(1) 岡崎智己（2013)「マヒドン大学（タイ）との教育連携プログラムの実践」『九州大学留学生センター紀要 』21号, 53-62.

(2) 吉川裕子・菊池 富美子・山田明子（2011)「体験型短期研修における日本語の授業－マヒドン大生短期研修を事例として」『九州大学留学生センター紀要 』19号, 45-56.

添付資料 1

2013年マヒドン大学短期研修プログラムのスケジュール

	Date	AM	PM
1	Mar. 31	Arrival at Fukuoka airport, City tour with Japanese students	
2	Apr. 1	Orientation to the program, Opening ceremony, Campus tour,	Cultural Exchange: Traditional Music in Japan and Thailand Japanese language class
3	Apr. 2	Japanese language class	Workshop: Japanese traditional culture-origami Cultural experience: Japanese kimono-fitting
4	Apr. 3	Study trip to the National Museum & Dazaifu Shinto shrine	
5	Apr. 4	Japanese language class Seminar: Japanese Economy/Finance	Japanese language class Seminar: Japanese Society/Law
6	Apr. 5	Study trip to Kumamoto & Mt. Aso	
7	Apr. 6	Free day	
8	Apr. 7	Free day	
9	Apr. 8	Japanese language class Presentations: My country-Thailand	Japanese language class Seminar: Becoming Japanese
10	Apr. 9	Japanese language class	Study trip the Fukuoka City Museum & lecture on Japanese history
11	Apr. 10	Japanese language class Seminar: Contemporary Japanese Politics	Study trip Itoshima peninsula and Kyushu University Ito campus
12	Apr. 11	Japanese language class Seminar: Migration and Multiculturalism in Japan	Cultural experience: Tea ceremony
13	Apr. 12	Japanese language class Program evaluation	Presentations: “The Japan I discovered”
14	Apr. 13	Departure from Fukuoka airport	

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，265－273
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 265-273

JTW プログラム2013－2014

今　井　亮　一*

目次

1.　本稿の目的
2.　JTW の概要
3.　他のプログラムとの関係
4.　実施組織
5.　学事暦
6.　プログラム内容
7.　各学部、学府、研究院との協力関係
8.　評価
9.　教室環境
10.　最近の ISP 改革
11.　国際化戦略と JTW の役割

１．本稿の目的

以下では、最近の JTW プログラムの実施状況を報告し現状の問題点と解決方向を検討する。本稿は、現在の JTW プログラムの実施状況から大きく乖離した内容を一切含んでいないが、あくまで筆者の個人的見解である。JTW の運営はほぼ定常状態に達しており、本稿では最近の実施に関する些末な内容は報告せず全体的な状況を説明する。

２．JTW の概要

JTW は1994年に第１期生を受け入れて以来、今日まで毎年、１年間（10月～翌７月）、短期留学生を受け入れ、英語による講義、演習、個人指導、見学などを提供している。１学期のみの参加も可能であり、毎年３月末には10数名の入れ替えがある。

2013年11月には第20期生を受け入れた。プログラム開始当初、受入人数は20名程度であったが、九州大学と学生交換協定を結ぶ海外の大学数の増加とともに規模を拡大し、現在では、年間、延べ60名程度の学生を受け入れている。2013年11月現在、48名の留学生が在籍している。

*九州大学留学生センター准教授。JTW プログラムコーディネーター。過去の JTW の実施状況については、九州大学留学生センター紀要（14号（2006年）～）に各年の報告がある。http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/center/f/iscannual.html

3．他のプログラムとの関係

留学生センターでは、海外から留学生を受け入れる短期留学プログラムとして「JLCC」「JTW」「ATW」の３つを実施している。JLCC は、すでに相当程度、日本語力を習得した留学生を１年間（10月～翌７月）受け入れ、日本語による講義や演習を提供するものである。JTW と ATW は、日本語力を前提とせずに留学生を受け入れ、英語による講義や演習を提供するものである。JTW（Japan in Today's World）は JLCC と同様、１年間（10月～翌７月）のプログラムである。ATW は６月末～８月末に実施される。筆者は現在、Jordan Pollack 教授とともに、JTW のコーディネーターを勤めている。

4．実施組織

JTW プログラムは、九州大学が責任をもって提供している。「留学生センター委員会」が教務上の意思決定機関である。その下に、実施の詳細を審議する「短期留学専門委員会」が置かれている。指導の実務は、留学生センターの「短期留学部門」に在籍する教授１名、准教授１名が、「JTW コーディネーター」として担当している。事務上の支援は、国際交流部が行っている。

5．学事歴

JTW は10月初日に開講し、翌年２月末日に第１学期（秋学期）を終了する。３月は春休みであり、４月に第２学期（春学期）を開講し、７月末日に終了し、課程修了を認定する。各学期、４回程度の Field Study という名称の研修小旅行（日帰りまたは１泊）がある。各学期末に、定期試験および ISP 報告会が行われる。

6．プログラム内容

JTW は以下のような個別要素から構成されている。各項目の詳細については、JTW プログラムのホームページ[1]を参照して欲しい。

1. 講義（授業科目）
2. 独立研究 Independent Study Program（ISP）
3. Advanced Research Laboratory（ALR）
4. 日本語科目
5. Field Study
6. Tutorship
7. Host Family Program

1 http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/jtw/index.htm。検索エンジンで「jtw kyushu university」と入力すれば、ほぼ先頭に出てくる。

以下、それぞれについて順に説明する。

6.1　授業科目

各学期、８から12の英語による科目が開講されている。これは、広範な分野（歴史、政治、経済、社会、文化、科学技術等）における、日本についての基礎的な知識を留学生に与えることを目的としている。最近の科目一覧は表１を参照されたい。担当者の所属は、人文系科目については留学生センターおよび学外が多く、社会科学系科目についてはもっぱら、留学生センター、法学部、経済学部である。

JTW 学生は各学期、６科目以上を登録・履修しなければならない。ただし、ISP をとる学生は１科目、ALR をとる学生は２科目、それぞれ科目履修に代えることができる（後述）。

JTW の特色は、すべての科目を、英語を使用言語として提供することにある。講師は、英語で講義し、（基本的に）英語の教材を用い、成績評価を英語で書かれた試験、レポート等に基づいて行う。学生の質問や討論もすべて英語で行われる。科目は、留学生センター専任教員のみならず、学内外の各分野の専門家が担当する。すべての科目は、全学に開放され、留学生のみならず、日本人学生も履修することができる。

表１　最近の開講科目

人文科学
- Adjusting to Japan
- Japanese Cultural Patterns
- Cultural Evolution of Japan
- Japanese Life through Tea Ceremony
- Enculturation and Education in Japan
- Modern History of Japan Ⅰ
- Modern History of Japan Ⅱ
- Two Murakami in Today's Japan
- Miyazaki Hayao's World
- Linguistic Description of Japanese
- Topics in the Study of the Languages of Japan
- Contemporary Japanese Literature
- Akira Kurosawa's Japan
- Contemporary Japan and Popular Culture

社会科学
- Introduction to Japanese Economy
- Japanese Economy in Transition
- Asian Pacific Political Economy
- Introduction to International Finance
- Japanese Politics Today
- Gender in Contemporary Japan
- Japanese Digital Culture and the Law
- Local Production in Kyushu

授業の形式は、講義を中心としつつ、学生の積極的参加を意図してセミナー形式を部分的に取り入れている。以前（第11期まで）は、形式上、科目は講義（core course）とセミナー（advanced seminar）に分けられていたが、現在、この区別は撤廃されている。

6.2　Independent Study Program（ISP）

JTW 学生は、各学期、１科目の履修を ISP に代えることができる。ISP は、講義、セミナーと並び、当プログラムの重要な構成要素である。学内外の教員が指導教員となり、各学生が自主的に作成した研究計画に基づき研究を行う。目的は、日本社会に関する自発的な問題意識の育成にあり、テーマは、人文社会系の分野から選ばれることが多いが、理系の学生は、日本の先端科学技術に関する文献的研究を選択することもできる。研究成果は、所定の様式に基づき論文および口頭発表の形で全学に公開される。最近の ISP テーマ例を表２に掲載した。

6.3 Advanced Research Laboratory (ALR)

JTW では、理科系学生のために、九州大学の理工系学部の研究室に所属し研究する機会を提供している。JTW 学生は、各学期２科目の履修を ALR に代えることができる。具体的には、ALR を履修すると、週２コマの演習を履修したことになり、合わせて２単位を取得できる。実際には、ALR を履修する学生は、研究室に机と椅子を与えられ、日本人学生と同様に、ほぼ毎日、終日研究に専念している。

6.4 日本語科目（選択）

JTW 学生は、自らの水準に対応した、言語教育としての日本語科目を履修し、日本語力を高めることができる。日本語科目は、留学生センターの日本語部門によって提供されているので、ここでは詳細な説明は行わない。

6.5 Field Study（選択）

JTW では、留学生に日本社会の「現場」を体験してもらうために、見学旅行を実施している。訪問先は、史跡、学校、工場に始まり、田植／稲刈り、有田焼、座禅、茶の湯の体験にまで及ぶ。最近の実施例を表３に掲載してある。例年、学生からの評判に基づき、内容と時期の見直しを行っている。

表2　最近の ISP テーマ例

人文科学

- Japanese Films
- Popular Culture
- The Development of Japanese Anime Industry and Its Global Influence
- MANGA: Culture Made in Japan, but Why?
- Masculine / Feminine Words
- An Exploration of the Ceramic Arts and History of Kyushu
- Sexuality in Japan in Absence of a Judeo-Christian Framework

社会科学

- IEvolution of a Japanese Industry:
- The History and Future of Commercial and Scientific Innovation in the Chemical Industry
- Explaining Changes in Japanese Security Policy
- Japanese monetary policy
- The future of steel industry in Korea and Japan
- Judicial Reforms in Japan and Eastern Asia
- The development of relations between Japan and South Korea since 1945
- Kanmin-Ittai: A study on the relationship between the government and the private sector in postwar Japan / Political Parties
- Japan: The Success Story of One of the World's Only Eco-cities / urban planning
- The effects of Imperial expansion on Japan's frontiers
- Job preference and Job searching of students
- Atypical forms of employment in Japan
- Contemporary architecture in Japan: Nexus World Housing influenced by Weiseenhofsiedlung

このうち、開講時（10月）のオリエンテーションでは、「異文化理解セミナー」を行い、慣れない外国での学生生活への円滑な導入を図っている。また、秋学期終了時（２月ないし３月）の再オリエンテーションでは、学生から半年間の感想や注文を聞き、プログラムの改善に役立てている。これら二つのオリエンテーションは参加必須である。

表３：　Field Study 実施例

実施月	宿泊	訪問先	内容
10	２泊	九重高原、阿蘇山、熊本など	オリエンテーション、異文化理解セミナー
10	１泊	西有田	稲刈り、有田焼
11	日帰り	大宰府	相撲部屋見学、天満宮、歴史
12	日帰り	福岡市内小学校	小学生との交流、授業の見学
3	１泊	別府	再オリエンテーション、温泉文化の理解
4	日帰り	梅林寺（久留米市）	座禅、仏教
5	日帰り	トヨタ九州	自動車工場見学
6	日帰り	博多座	歌舞伎鑑賞
6	１泊	西有田	田植

６.６　Tutorship

JTW では、全学からチューターを募り、JTW 学生の修学・生活環境への適応を支援している。チューターとは別に、「日本語パートナー制度」があり、留学生には日本語力向上、日本人学生には外国語力向上の機会となっている。

６.７　Host Family Program

学生の希望に応じて、Host Family を斡旋し、週末や休暇期間中に日本人の家族と過ごす機会を提供している。

７．各学部、学府、研究院との協力関係

JTW の専任教員は２名（教授１、准教授１）しかおらず、当初から自立ではなく、全学の緊密な協力の下に運営されることになっている。具体的には、講義科目提供および Independent Study Program（ISP）、Advanced Research Laboratory（ALR）の指導の多くを、全学各部局の協力で実施している。協力関係のほとんどは、JTW コーディネーターから担当教員への個人的依頼で実現しているが、部局の事情によって、研究院へ公式に依頼し、教員を紹介してもらうという形式を取っている。

８．評価

当プログラムでは、各学期末に学生に調査用紙を配布し、「授業評価」と「プログラム評価」を行っている。授業については、内容の適切さ、難易度、教員の英語力と準備程度、宿題・課題の量と質などが、プログラムについては、教室、環境、宿舎、研修旅行（Field Study）、ISP などが、それぞれ５段階で評価され、集計結果を「短期留学専門委員会」で議論し、次学期、次年度のプログラム改善に役立てている。集計結果を見る限り、JTW はおおむね好評である。その証拠として、年々、JTW に参

加する留学生は増えており、当プログラム２人の専任教員というささやかな陣容で、留学生30万人計画を掲げる国策に大いに貢献していると自負している。

９．教室環境

JTW は20年前の開始時点に20人を受け入れ、おおよそ30人程度の規模を想定して２人の専任教員が配当されていると考えられるが、その後の規模拡大にもかかわらず、教育設備の拡充は特に行われていない。特に、講義教室の狭さ、数の少なさが問題である。JTW では常時８～12科目を開講しているが、60名近い在籍者が自由に選択する結果、多くの科目で教室が混雑し、授業環境が悪化している。

留学生センターの建物では、全学の留学生のために日本語科目が数多く開講されている。留学生増加という国策を忠実に遂行した結果、留学生センターの狭隘な建物の中で利用可能な教室は慢性的にフル稼働しており、JTW の講義科目配当の大きな制約となっている。

10. 最近の ISP 改革

規模の拡大はJTWが国際的に評価されている証拠ではあるが、同時に改善すべき課題の増加をも意味している。特に個人指導（ISP）は、諸外国の交換留学プログラムにはあまり見られない JTW の特徴であり、国際競争力の源泉となっていると同時に、常に解決すべき課題を抱えてきた。

そこで、2008年から2009年にかけて ISP の実施形態について大きな改革が行われた。本節ではそれを説明しその効果について報告する。ISP 履修についてはこれまで、おおよそ次のような規則改訂が行われてきた。

第１期～第10期まで、ISP は必修であったが、学生は履修期間について１学期（半年）または２学期（１年、通年）を選択することができた。

第11期から第14期までは、原則１年間のプロジェクトが必修となった。

第15期には、半年間の ISP も可能となり、ほぼ第10期までの制度と同様になった。ただし、ISP を履修しない学期は、講義科目を一つ追加履修しなければならない。

第16期には、ISP は選択科目となり、ISP を履修しなくても JTW 修了は認定されるが、ISP を履修しない学期は、代わりに講義科目を一つ追加履修しなければならない。

JTW が、修了要件としての ISP 履修義務を緩和し、原則として ISP を選択肢とした背景を説明しよう。

まず第１に、近年、年間のべ60名近い留学生が全世界から参加している。これは、開始当初に想定された30人前後の、ほぼ倍の規模である。規模の拡大にともない、JTW コーディネーターが指導教員を全学に依頼する業務負担や、多くの学生の自主研究を自ら指導する負担が過重になりつつあった。根本問題として、JTW プログラムには「定員がない」。いかなる教育課程でも、質の維持をはかるには適切な範囲への規模の抑制が必要である。人数は倍になっているにもかかわらず、JTW を担当する専任教員（コーディネーター）は２人のままである、

第２に、JTW は九州大学本部の業務であり、全学の教員はその実施に協力することが期待されている。しかし、期待通り協力することを担保する制度は整備されていない。例えば、ISP の指導は、全学各部局の専任教員の国際化への熱意に支えられた、事実上ボランティアである。しかし、政府からの国立大学法人への改革要請の強化にともない、部局外のことに割ける時間は限られている。現在、留学生センター以外の教員はボランティアで ISP の指導教員を引き受けており、ISP を指導したからといってそれぞれの部局の業務が軽減されるわけではない。

第３に、現在、九州大学は福岡市西端及び隣接する糸島市に広がるエリア（伊都キャンパス）への移転途中にある。農学部を除く大半の理工系学部・研究院、および言語文化・比較文化研究院はすでに新キャンパスに移転した。ISP 指導の需要が大きい人文学の分野では多くの教員が伊都キャンパスに移転したわけであるが、JTW が拠点としている箱崎キャンパスから伊都キャンパスまでは、専用のシャトルバスでも50分、公共交通機関を乗り継げば１時間半ほどかかる。しかも、JTW 学生が滞在している学寮（留学生会館）は福岡市の東端に位置している。経済力に乏しい短期留学生が ISP の指導を得るため伊都キャンパスに通うことは実際上困難である。その結果、ISP 指導教員を依頼できる教員は箱崎キャンパス所属に限られることになり、増加するJTW学生の希望に答えることが難しくなっている。

第４に、九州大学の教員の英語力は、近年、目覚ましく向上しているとはいえ、留学生の期待に応えるレベルの英語を操る教員の数は依然として限られる。筆者は、各学生を指導教員に依頼する場合は、JTW が期待するレベルで英語で指導していただけるか、必ず確認させていただいている。

第５に、規模拡大にともない、自主研究の意欲の十分でない学生が増加し、指導教員の大きな負担となる事態も散見されるようになってきた。JTW は、各国の有力大学（パートナー校）との信頼関係に基づいて運営されており、パートナー校が自信を持って推薦してきた学生を優秀とみなして受け入れてきた。しかし、現実には、すべての学生が、それぞれ積極的な学問関心を有し、自主研究を始めるに十分な基礎知識を有しているわけではない。指導教員の下で勉強を始めてみたものの、途中で意欲を失うこともある。

最後に、JTW が参加者の日本語力を前提としない以上、来日直後から自主研究を義務付けるより、各人の日本語習得状況に応じて、ISP の履修を選択肢として提供する方が、教育効果は高いと考えられる。実際、日本に関する様々なテーマについて、十分な英語文献が存在する場合はごく稀である。これは、まったく日本語初心者である留学生にとって、大きな物理的制約である。実際に研究を始めてみて、英語文献がほとんど存在しないことを知り、研究意欲を喪失する学生は少なくない。とりあえず来日から半年ぐらいは、日本の政治経済・文化社会についてJTWの講義を履修することを通じて自主的な問題意識を養うように促し、同時に日本語の勉強に力を注がせた上、２月ぐらいの時点であらためて自主研究するかどうか判断させてこそ、きめ細かい教育指導と言える。現在では、日本語力の低い学生や、学問的問題意識の低い学生には、秋学期は ISP の履修を見送り、学期末にあらためて春学期の履修を検討することを選択肢として提案し、自主的に決めさせている。

以上のような反省点に立ち改革を行い、ISP を選択肢とした結果、今日では、ISP の実施におけるトラブルはほとんどなくなるとともに、各部局に過大な負担をかけることもなくなった。10月時点で、

おおよそ３割の学生がISPを選択し、そのほとんどが４月に継続更新する。さらに、約２割の学生が４月から新たな１学期のISPを始める。これは、４月から新たに参加する10名前後の学生からだけではなく、２月の中間報告会での発表に触発され、自分も研究をやってみたいという学生がいるからである。

現在、ISP指導について、おおよそ全学から協力を得ている。しかし、学内で適切な指導教員を見つけることが難しいテーマについては、学外の研究者に指導をお願いすることもある。特に、留学生に人気のあるサブカルチャー分野については、学内で指導可能な教員はほとんど伊都キャンパスの言語文化・比較文化所属の教員に限られる。しかし、伊都キャンパス所属教員にISPの指導を依頼することは物理的に難しいことは、先ほど説明した通りである。その結果、専任教員が２名と非常に少ないJTWでは、学外の専門家（外国人）を非常勤教員として雇用し、学内では講師を見つけることが難しい科目を教えてもらうだけでなく、ISPの指導も引き受けてもらっている。「学内では講師を見つけることが難しい科目」とは、現代の若者文化、現代文学、伝統芸能などである。

ところで、ISPの選択科目化によって、コーディネーターの業務負担が軽減されたわけではない。まず、学生来日時に、ISP履修についてきめ細かく学生の意思を確認して各部局に依頼した後で、同様のことを３月末～４月初にほぼ同数の学生について行わなければならない。10月または４月に依頼する教員の数も、通年履修が義務だった時代に比べて、大きく減るわけではない。というのも、通年の時には、１人の教員が３人程度の指導を引き受ける場合が多かったからである。信頼できる教員の数は限られているのに、部局の教員１人あたりに依頼する人数をしぼろうとすると、指導力の低い教員にまで依頼しなければならなくなる。この事情は多くの信頼できる教員の理解を得ており、「自分が面倒を見ましょう」とおっしゃってくださる先生の厚意で、かろうじて40人を超える留学生が面倒を見てもらっていたわけである。

ISPの選択科目化にはいくつかのメリットがある。まず、信頼できる部局教員の超過負担を軽減し、ISPの持続可能性を高めたと言える。筆者は、毎年ノルマのように複数のJTW学生の指導を部局教員に依頼するべきではないと考えている。理想的には、教員あたり学生１人に限定するか、ある年に複数の依頼をする場合には翌年は休んでいただく程度のペースで、余裕を持った協力をお願いするべきであると考えている。

第２のメリットとして、講義科目登録学生が増え、講義担当教員の意欲を高めている。JTWでは毎年講義課目を増やす努力を続けているが、これによって部局教員の協力を得ても、肝心の履修学生が少なければ、せっかく協力してくれた教員の期待を裏切ることになる。ISP選択科目化で講義科目登録者が増えたことは、意図せざる喜ばしい結果であった。

第３のメリットとして、ISPよりも講義科目をもっと取りたいという学生の満足度が、これまでより高まったと考えられる。特にJTWでの取得単位を母校の成績にトランスファーしたい学生は、ISPの負担軽減を歓迎している。そもそも、学生の選択肢を増やし、自主研究をしたい学生には信頼できる教員を紹介し、講義を取りたい学生には取りやすい環境を整備することは、留学生にとって有利な改革であり、JTWプログラムの質を向上させていると言える。

11. 国際化戦略と JTW の役割

以上、JTW の現状と諸問題を概観したが、以下では、日本の大学の国際化戦略における短期留学プログラムの役割について、断片的な考察を行う。

近年、日本の大学の国際化は急速に進展し、政府の「留学生10万人計画」はほぼ達成され、今は留学生を30万人にまで増やす計画が進行している。これに合わせて、「グローバル30」プログラムも実施された。

しかし、実際のところ、現在の国際化では、もっぱら部局レベルの独自の取り組みこそ目立つけれど、全学を挙げた組織的な取り組みはあまり見られないというのが、我が国の一般的状況ではないだろうか。

これは、大学に限らず我が国の行政組織に広くみられる現象ではあるが、一言で言って、「部局あって大学なし」で、進み方が「タコ壺」的なのである。国が大方針を立て国立・私立の有力大学に指示しても、具体的な対応はそれぞれの部局に案を出させる、という形になっている。結果として、それぞれの部局が独自の国際化プログラムを立ち上げたのであるが、大学全体として統合的取り組みが行われている印象はあまりない。

JTW は、規模こそ小さいけれど、日本の政治経済・文化社会について、できるだけ包括的な科目を体系的に提供している。というのも、法学、経済学、人文学、人間環境、比較文化など「文系」の各部局から包括的な協力を得ているからこそ可能になっている。

大学の国際化においても、各部局でバラバラに英語科目を開講するというのではなく、全部局が参加し、定員も割いて、独立の組織的対応をする教育組織を立ち上げるのが理想であろう。しかし、それ以前に、もっと簡単にやれることがあると思われる。

JTW の科目について、とある先生から、日本人学生をもっと参加させるべきだという提案をいただいたことがある。これはもっともであるが、現行の学部制度では、定員の拘束が強く、他学部科目を積極的に履修するインセンティブが学生に与えられていないだけでなく、そもそも情報が広く提供されていない。全学的に、英語で講義されている科目の体系化と、履修促進の取り組みがなされてしかるべきだろう。そもそも、今のところ、「英語による講義は留学生のため」という意識が強く、多くの関係者が「自分は関係ない」と思っているところが問題であろう。

JTW は個人指導の機会として ISP を提供しているが、本来、日本らしい個人指導の形式は「ゼミ」である。法学部、経済学部、文学部など、いわゆる文系の学部だけでも、英語で行うゼミを立ち上げ、その情報を共有することができれば、JTW 学生は、ISP の代替選択肢として、ゼミ参加を選ぶこともできる。ゼミ形式の授業の導入は、今後の検討課題である。

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，275－282
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 275

2012年度　九州大学留学生センター・留学生指導部門報告

スカリー　悦　子*

白　土　　悟**

高　松　　里**

１．はじめに

2012年（５月１日現在）、九州大学の留学生数は、1,931人となり過去最高となった。全国で５番目に留学生の多い大学である。

九州大学留学生センター・留学生指導部門は、これらの留学生および留学生に関わる教職員・学生、さらには地域の人々を対象として、様々な活動を行っている。

留学生指導部門の活動は、①相談活動（アドバイジング＆カウンセリング）、②教育活動、③留学生に対する支援システムの形成、④研究・研修活動、⑤学内協力講座・委員会、⑥社会連携、である。

２．相談活動

（１）相談室および担当者

留学生センターは、センター本館がある箱崎キャンパスと伊都キャンパスに相談室を設けている。箱崎キャンパスではほぼ毎日、伊都キャンパスでは、週２回の相談活動を行っている。

また、国際交流会館（留学生宿舎）は、香椎浜会館（270室）と井尻会館（59室）があり、新入留学生対象のオリエンテーションやサポーターへの支援など、指導部門教員が関わっている。

担当者は、スカリー悦子、白土悟、高松里の３名で、分担して各キャンパスの相談室を運営している。

（２）来談状況

相談室における相談件数は表１の通りである。ここでいう相談件数には、数分で済むような簡単な情報提供は含まれていない。相談件数は、986件（延べ数、昨年度は1065件）である。

全体の相談件数が減っているのは、宿舎問題（国際交流会館）が135件（昨年度）から74件（今年

*九州大学留学生センター教授
**九州大学留学生センター准教授

表1　九州大学留学生センター2011年相談件数

留学生からの相談　　2012年(2011年)

修　学	入学・進学関係	30(30)
	教育制度・内容	52(51)
	進路相談	54(30)
	研究室の人間関係	10(21)
生　活	法律的問題	7(2)
	経済的問題	2(30)
	宗教的問題	7(5)
	宿舎問題（国際交流会館）	74(135)
	宿舎問題（その他）	30(68)
	生活問題	15(18)
	事故病気等	13(7)
	渡日・滞日許可	14(0)
	人間関係	21(31)
	子弟の教育問題	0(4)
	帰国準備	6(2)
	メンタルヘルス	46(14)
	国保・一般保険	0(0)
その他	各留学生会	30(49)
	その他分類不可	15(30)
小　計		426(527)

その他の外国人からの相談

	入進学	38(28)
	その他	24(9)
小　計		62(37)

日本人からの相談

学　生	留学生とのトラブル	5(11)
	海外留学情報	14(25)
	国際親善会関係	14(15)
	その他	99(107)
教職員	入進学	8(4)
	奨学金	0(3)
	日本語関係	11(5)
	コンサルテーション	143(122)
	その他	48(50)
外　部	情報・コメント	47(59)
	イベント・講師依頼	51(61)
	入進学	2(2)
	苦情	4(0)
	その他	52(36)
小　計		498(501)
総　計		986(1065)

度)、宿舎問題（その他）が68件から30件に減ったこと、また経済問題が30件から２件に減ったことが主な原因である。

①「留学生からの相談」は426件（昨年度527件）であった。

「修学問題」は146件であり、進学や進路などの将来についての相談や、研究室における指導教員や他の学生との関係についての相談があった。

「生活問題」は235件であった。割合的には減ったが「宿舎問題（国際交流会館）」の入退去に関する相談（74件）や、会館以外のアパート等の相談も多かった（30件）。また、目立って増えているのが「メンタルヘルス」である（46件、昨年度は14件）。不眠や鬱、発達障害疑いの学生の相談などがあった。留学生同士や日本人学生との「人間関係」についての相談も多かった（21件）。

「その他」は、45件であり、各留学生会の行事などについての相談、イスラム学生の礼拝場所についての相談などがあった。

②「その他の外国人からの相談」は62件（昨年度37件）であった。

昨年度より増えている。これは、大学院に入学を希望している日本語学校の留学生からのものが多い。研究生として入学したいが、その手続きが難しい、受け入れてくれる先生を探すのが大変、などの相談があった。

③「日本人からの相談」は、498件（昨年度501件）であった。

「日本人学生」からの相談としては、海外に留学を希望している、留学生の友人の問題、などの相談があった。その他、留学生センター教員が顧問をしている国際親善会の学生からのもの（国際交流行事に関するもの）があった。

「教職員」からの相談の中では昨年度に引き続き、「コンサルテーション」が最も多い（143件、昨年度は122件）。留学生を直接指導したりサポートをしている教職員からの相談である。留学生が増えていくが、教職員が必ずしも留学生について詳しいわけではない。様々な問題の解決について、一緒に

考えている。

「外部」からの相談では、地域団体（国際化協会や警察など）との情報交換や情報提供が多かった。

３．教育活動

（１）オリエンテーション

留学生課が主催して、新入留学生が入学してくる直前の９月と３月に「サポートチームオリエンテーション」（高松担当）を実施し、入学後の４月と10月に、「新入留学生オリエンテーション」（スカリー担当）が遠隔会議システムを使って各キャンパスで実施された。

2012年３月に「留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門2012年版」を3,500部印刷発行し、九州大学の入学式後のオリエンテーション等で配布した。

（２）授業

本年度は、昨年度と同様に、全学教育（主に学部１～２年生を対象）５コマ、大学院（人間環境学府３コマ、大学院共通１コマ）４コマ、留学生センター１コマを担当した。その他、１回のみ担当した授業などもある。

表２　担当授業（2012年度）

	前　　期	後　　期
学部 （全学教育）	文系コア科目「教育学」（火曜日５限、スカリー） 総合科目「日本事情」（水曜日５限、高松） 総合科目「大学とは何か」 （水曜日５限、リレー講義１回、白土）	文系コア科目「心理学」（火曜日４限、高松） 総合科目「日本事情」（水曜日５限、白土） 少人数セミナー「留学生交流論」 （金曜日５限、白土）
大学院 （人間環境学府）	「留学生教育政策論」（金６限、白土） 「教育学研究法－国際教育」 （リレー講義、１回、白土）	「留学生アドバイジング論」（集中、白土） 「異文化適応論」（集中、高松）
大学院 （大学院共通科目）		国際性領域「Intercultural Communication」 （火曜日３限、スカリー）
留学生センター	日本語研修コース「日本の人と話そう」 （１回、高松）	日韓共同理工系学部留学生予備教育「日本文化・日本事情」（木曜日３限、スカリー・白土・高松） 日本語研修コース「日本の人と話そう」 （１回、高松）

４．留学生に対する支援システムの形成

（１）サポートチーム・チューターへの支援

①学部サポートチーム

学部留学生（１年生）に対しては、指導部門教員がサポートチームの指導にあたった（高松）。

②大学院サポートチーム

「サポートチーム説明会（留学生課主催）」にて、９月と３月に講演を行った（高松）。

③日韓共同理工系学部留学生予備教育・チューター

10月に来日した予備教育留学生のためのチューター（６ヶ月間）に対してオリエンテーションを行った。（高松）

（２）初期適応支援（４月と10月）

来日したばかりの留学生に対しての支援は、留学生課が中心となり、留学生指導部門教員も協力する形で、システマティックに行われている。

日本に着いたばかりの留学生は、事前に登録を行っておけば、九州大学のバスで、空港から寮までのピックアップサービスが受けられる。国際交流会館では、入館関連書類については会館サポーター（主に留学生の先輩）が担当し、続いて外国人登録や銀行口座開設などについては、留学生課サポートセンターの職員および九州大学国際親善会の学生が担当して、新入留学生の支援をしている。会館サポーターへの助言はスカリーが、国際親善会の学生への助言は高松が担当した。

その他、社会人ボランティア団体（そら）によって「市内ツアー」などが実施され、留学生が日本社会に適応しやすいように支援している。

留学生課主催の「新入留学生オリエンテーション」にて講演を行った（スカリー）。

（３）学生団体に対する顧問としての指導・助言

留学生指導部門の教員は以下のような留学生の団体や、学生サークルの顧問となっている。九州大学留学生会は白土が、九州大学ムスリム学生会と九州大学国際親善会は主に高松が顧問として、様々な活動や要望に対して助言を行った。

①九州大学留学生会（KUFSA=Kyushu University Foreign Student Association）

九大に所属する全留学生を代表する会である。５月に「スポンサーミーティング」が行われ、１年間の活動について、地域の支援団体と共に検討を行った。その他、バスハイク、スポーツ大会、年末の国際親善パーティなどを実施した。

②九州大学ムスリム学生会（KUMSA=Kyusyu University Muslim Student Association）

ムスリム学生会は、九大に所属するイスラム教留学生の団体である。

４月にイスラムウィーク（パネル展示、イスラム衣装の紹介、アラビア書道、映画、講演、お菓子、各国の料理提供）が、九大ムスリム学生会が主催し、図書館、国際親善会、留学生センターが協力する形で実施された。

４月５日（木）：事前打ち合わせ（福岡モスク見学、展示パネル等の確認、軽い夕食）

４月16日（月）：ウエスト２号館２階ロビー

４月17日（火）：センターゾーン通路（比較社会文化事務棟裏）

４月18日（水）19日（木）：箱崎中央図書館内（図書館とタイアップ）

４月21日（土）：国際ホールにて講演＆イスラムフードフェスティバル

③九州大学国際親善会（KUIFA=Kyushu University International Friendship Association）

会員は年々増え、100名を超える大きなサークルとなっている。

毎年の活動としては、２月の「受験生案内」、４月と10月の「新入留学生支援」、５月から行われるシンガポール大学との交換プログラムの「Inter Link FUKUOKA」、11月の「九大祭への出店」などである。また、箱崎地区で毎週木曜日に「コーヒーアワー」、伊都地区では毎週火曜日に「全学コーヒーアワー」（センターゾーン）、毎週金曜日に「糸島コーヒーアワー」（ウェストゾーン）を行った。

（４）ボランティア団体の指導・助言

①「福岡フレンドリークラブ」の活動への助言（白土）

九州大学には家族同伴の留学生が約400人いる。400人近くの夫人たちやその子どもたちの生活支援が大きな課題になっている。福岡フレンドリークラブは地域の日本婦人で構成される団体であり、会員数は約35人、九州大学教員の夫人も参加している。 留学生夫人との交流と支援を目的に、毎週水曜日に留学生センター分室にて活動している。

活動は、留学生夫人向けの日本語授業（毎週12:30 ～ 14:20）および交流会（月１回14:30 ～ 16:30）である。これらの活動を通じて親しくなった留学生夫人たちの生活上の相談にも応じている。

②「九州大学留学生サポートネットワーク〈そら〉」の活動への助言（高松）

〈そら〉は、社会人を中心としているが、九大の学生（留学生）や他大学の学生も参加しているボランティア団体である。主な活動としては、新入留学生を対象とした４月と10月の市内ツアー、井尻国際交流会館における「日本語交流」、引っ越しや運搬の手伝い、イベントの企画、その他日本語会話パートナーなどを行った。

５．研究・研修活動

（１）著書・論文・報告

【2012年】

- 白土悟・于東振・垂見直樹『中国の地方都市における留学人材政策の研究－遼寧省の瀋陽・大連を中心にして』平成21・22・23年度文部科学省科学研究費補助金・報告書、研究代表者　白土悟、2012年
- 白土悟「アジアにおけるグローバル人材育成に関する大学の役割」『比較教育学研究』第46号、198-201頁、2013年．3月
- 高松里『社会的マイノリティへのまなざし』日本人間性心理学会編「人間性心理学ハンドブック」（創元社）、131-141．2012年
- 高松里『サポート・グループ』日本人間性心理学会編「人間性心理学ハンドブック」（創元社）、318-319．2012年
- 高松里『留学生の人間関係―多文化クラスにおける実践から―』九州留学生問題フォーラムニュースレター、No.73，1-13．2012年

【2013年】

- スカリー悦子・白土悟・高松里『2011年度九州大学留学生センター・指導部門報告』九州大学留学生センター紀要、21、117-124. 2013年
- 高松里『セルフヘルプ・グループの機能と役割（１）』特定非営利活動法人生活の発見会発行「生活の発見」、No.635, 2-13. 2013年
- 高松里『セルフヘルプ・グループの機能と役割（２）』特定非営利活動法人生活の発見会発行「生活の発見」、No.636, 2-12. 2013年
- 高松里『セルフヘルプ・グループの機能と役割（３）』特定非営利活動法人生活の発見会発行「生活の発見」、No.637, 2-13. 2013年

（２）学会活動

【2012年】

- ６月８・９・10日（金・土・日）：異文化間教育学会（APU, 白土）
- ６月15・16・17日（金・土・日）：日本比較教育学会（九大文系キャンパス、白土「留学生受け入れ・定着と地域の活性化」発表）
- ６月23日（土）多文化間精神医学会（九大医学部、白土「留学生受け入れ体制の再考」講演）
- ６月30日（土）日本評価学会（神奈川、文教大学、白土）
- ８月：日本学生相談学会「学生相談研究」投稿論文査読（高松）
- ９月21日（金）～ 23日（日）: 日本人間性心理学会にて個人発表および自主企画実施（高松、東京）

【2013年】

- ３月23日（土）：異文化間教育学会理事会（駒沢大学、白土）

（３）研究活動

【2012年】

- ５月11日（金）～ 14日（月）:「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄」（沖縄、高松）
- ７月２日（月）：JCSOS セミナー（九大国際ホール、白土）：海外留学派遣の危機管理等について
- ７月14日（土）～ 16日（月）：全国学生相談研究会主催「第28回エンカウンター・グループ」にファシリテーターとして参加（高松、大分県）
- ７月28日（土）:「留学生のための音楽イベント」準備会
- ８月12日（日）：被災地臨床報告会（司会、高松、西新プラザ）
- ８月27日（月）：科研女性研究セミナー（スカリー）
- ９月20日出版　：日本人間性心理学会編「人間性心理学ハンドブック」（分担執筆、高松）
- 11月29日（木）：九州留学生問題フォーラム講演会 JETRO 吉田氏「ブラジル移民について」（司会、白土）
- 高松里「留学生の人間関係―多文化クラスにおける実践から―」九州留学生問題フォーラムニュースレター No.73（2012/10/30）

• 12月23日（日）～ 25日（火）：九重 EG プロジェクト会議（高松）

【2013年】

• １月28日（月）：大学教授の国際比較についてカンファレンス出席（スカリー）
• ２月２日（土）３日（日）：「当事者性を臨床／研究に生かす：福岡ワークショップ」主催（福岡市、高松）
• ２月10日（日）：「多様な「生」を描く質的研究会」参加（京都市立命館大学、高松）

６．学内協力講座・委員会・その他

①留学生センター関係委員会

• 留学生センター委員会（スカリ－）
• 国際交流専門委員会（スカリー）
• 高等教育開発推進センター委員会（スカリー）
• 国際交流会館サポーター会議（スカリー）
• 全学英語講義会議（スカリー）
• 日韓共同理工系学部留学生予備教育コーディネーター会議（スカリー、白土、高松）
• 私費外国人留学生特別入学試験・試験監督（白土）
• 学生委員会（高松）
• 学生生活相談連絡協議会（高松）

②学内協力講座関係

• 人間環境学府における研究指導（白土、高松）
• 人間環境学府博士課程論文調査委員会（白土）
• 人間環境学府修士論文口述試験（白土）
• 人間環境学府修士課程（社会人特別選抜）前期・後期入試（白土）
• 人間環境学府修士課程（一般）前期・後期入試（白土）
• 人間環境学府附属総合臨床心理センター研究員（高松）
• 保健管理専門委員会（高松）
• キャンパスライフ・健康支援センター（2013年４月発足予定）カウンセラー会議（高松）

③外部非常勤等

• 佐賀大学医学部非常勤講師（高松）
• 九州産業大学国際文化研究科臨床心理センタースーパーバイザー（高松）

7．社会連携

【2012年】

- 4月14日（土）：福岡帰国留学生交流会・総会（白土）
- 5月8日（火）：九大学研都市・外国人にも住みやすい環境整備推進会議（白土）
- 5月19日（土）：国際交流－市民団体（スカリー）
- 5月22日（火）：佐賀大学にて講義「労働とメンタルヘルス」（2コマ、高松）
- 6月8日（金）：会館と市民団体交流　（弁論大会）について（スカリー）
- 6月21日（木）：九州留学生問題フォーラム（理事会、白土・高松）
  同上：講演「留学生の人間関係」（高松）
- 7月5日（木）：市民団体と交流打ち合わせ（スカリー）
- 7月7日（土）：福岡国際育英会理事会（白土）：今宿の国際交流会館の運営等について。
- 7月24日（火）：福岡帰国留学生交流会会合（白土）
- 8月4日（土）：NPO法人日本家族カウンセリング協会主催「夏期研修会」にて講演（東京、高松）
- 9月12日（水）：市民団体ボランティア女性会との打ち合わせ（スカリー）
- 10月5日（金）：市民団体と行事について打ち合わせ（スカリー）
- 10月16日（火）：福岡フレンドリークラブとの会合（後期日程について。白土）
- 10月23日（火）：九州シルクロード協会・運営委員会（白土）
- 10月24日（水）：福岡犯罪被害者支援センターにて講演（高松）
- 10月25日（木）：東区役所と留学生に関する業務打ち合わせ（スカリー）
- 10月25日（木）：九州留学生問題フォーラム・事務局会議（白土）
- 10月28日（日）：留学生との料理交歓会（於：中村学園大学、太宰府天満宮崇敬会主催、留学生130人参加、白土）
- 11月8日（木）：九大学研都市・外国人にも住みやすい環境整備推進会議（市役所、白土）
- 11月19日（月）：国土交通省海の中道海浜公園ユニバーサルデザイン検討委員会（白土）
- 11月28日（水）：福岡帰国留学生交流会（白土）
- 11月29日（木）：佐賀県医師会産業医研修会にて「事例検討」担当（佐賀県、高松）
- 12月2日（日）：地域日本語支援コーディネーター研修にて講演「留学生の人間関係と日本語能力」（高松）

【2013年】

- 1月10日（木）：日本学生支援機構『留学交流』編集協力者会議（駒場会館、白土）
- 1月16日（水）17日（木）：地域貢献のため中学校訪問（スカリ－）
- 1月22日（火）：福岡産業振興協議会・中経協と留学生との交流懇談会準備会（白土）
- 1月29日（火）：国土交通省海の中道海浜公園UD検討委員会（白土）
- 2月18日（月）：中経協と「産業振興協議会と留学生との懇談交流会」の打ち合わせ（白土）
- 3月12日（火）：九州留学生問題フォーラム理事会＆講演会（天神ビル、白土）
- 3月25日（月）：福岡産業振興協議会と留学生との交流会（西南学院大学、白土）